

実践レポート

単元・題材名 (授業名)	「相田みつをの詩を考える」 ～自分の実体験と重ねながら～ (第3回)	生 徒	1年生徒8名
		場 所	1年窯業科教室
日 時	平成29年11月7日 (火) 5校時	指 導 者	T1:中市 T2:高山

① 互恵的な相互依存関係

2人1組(以下「ペア」)で詩について考え、互いに交流し合うことと、最後はペアごとにまとめた内容を全体に発表することを確認し、それを本時の目標とした。各ペアにおいては意見を双方で出し合い、1つの詩に対して1枚のプリントに2人でまとめるよう設定することで、協力しなければ完成できないよう設定した。終了の時刻を意識し、活発な意見交流をしているペアもあれば、教師からの支援を受けて交流をしているペアもあった。

② 対面的なやりとり

お互いが詩を読んだの考えや感想、内容に関連する実体験を述べ合い、1枚のプリントにまとめることができた。詩の内容に関する実体験を発表することで、聞き手が「自分も同じ経験がある」と共感することが多くあり、全員で詩の内容を考え、分かち合うことができた。

③ 個人としての責任

ペアでの話し合いの前に個人で考えをまとめる時間を設定したことで、じっくりと詩に向き合うことができた。そのことで相手に頼ることなく、自分の考えや感想を話し合いの場で発信することができた。

④ 協同学習スキル

相手の目を見ることやなずき、傾聴することなど、今回は課題が多く残った。話し合いではなく、自分の感想をひたすら言うだけで、「相手に伝えよう」という気持ちが生徒同士であまり感じられなかったのではないかと推測する。したがって次回は、円満な人間関係と話し合いの方法を授業の前段で指導し、その必要性を考えてもらう時間を設定する。

⑤ チームの振り返り

本時は本単元の最初の活動である話し合い活動にじっくり時間をかけたため振り返りができず、話し合い後はすぐに発表とした。そのため、次回はコミュニケーションスキルの項目を表にまとめて生徒に配付するとともに、自己評価と他者評価を実施し、今後の話し合い活動に生かしていく。

1 学年 国語科 学習指導案

単元・題材名 (授業名)	「相田みつをの詩を考える」 ～自分の実体験と重ねながら～ (第4回)	生 徒	窯業科1年生 8 名
		場 所	窯業科 1 年教室
日 時	平成29年12月4日(月)5校時	指 導 者	T1:中市 T2:高山

1 授業のねらい

(単元の目標)

- ・ 詩について考え、自分の想いを整理して他者へ伝えることができる。
- ・ 詩と自分の実体験を重ね合わせて考えることができる。
- ・ 相田みつをの詩の技法をまねして、詩を書くことができる。

(本時の目標)

- ・ 詩の内容と自分の実体験を重ね、プリントに自分の考えを記入することができる。
- ・ 非言語的なコミュニケーションで相手の意見に共感していることを伝えることができる。
- ・ 仲間と詩についての意見を交流することができる。

2 生徒について

- ・ 教師の問いかけに対して反応が良く、積極的に授業に参加する生徒が多くいる。
- ・ 自分で考えることはできるが、伝え合うことが苦手な支援を必要とする生徒が複数いる。
- ・ 相手の意見などを尊重できず、自分の意見ばかりを言ってしまう生徒が多くいる。

3 指導計画

- 第1回 10月23日 : 相田みつをについて知ろう
- 第2回 10月30日 : 気になる詩を選び、内容について考えてみよう
- 第3回 11月 7日 : 考えた内容について交流しよう①
- 第4回 12月 4日 : 考えた内容について交流しよう②(本時)
- 第5回 12月11日 : 考えた内容について交流しよう③
- 第6回 12月18日 : 相田みつをの詩の技法を真似し、詩を書いてみよう

4 本時の展開

	学習活動	生徒の活動	教師の活動	教材教具
導入 3分	・ 始業挨拶 ・ 本時の説明	・ 日直に合わせ挨拶をする。 ・ 1つの詩について学ぶことや、コミュニケーションの評価をすること、発表することなどを確認する。	・ 授業開始の合図をする。 ・ 本時の内容について黒板を使用しながら確認させる。 ・ チョークの色を変え、本時の目標を明確にする。 <協同学習の要素や配慮事項> ・ 1つのテーマについて全員で学び合うことや、仲間と評価し合いながら話し合いを進めることを共有し、導入を行う。(①)	・ 黒板

展開 35 分	- 詩について考える。 - プリントに考えのまとめ - ペアで意見を交流及びまとめ	- 詩について板書をプリントに記入する。 - ACジャパンのCMのロールプレイ（代表生徒）を見て、考える。 - 詩と実体験を重ね、まとめる。 - 個人で取り組んだワークシートを基に、ペアでまとめのプリントを完成させる。	- 詩についての内容や情報などを板書し、生徒に質問しながら理解を深めさせていく。 - ロールプレイを通し、視覚的に詩の内容を捉えさせ、実体験と結び付かせていく。 - 自分は普段生活している中で柔らかい接し方が多いか、セトモノのように固い接し方が多いのかを考えさせるよう、言葉掛けをしていく。 <協同学習の要素や配慮事項> - 話し合いの前に自分の考えを明確にし、円滑に意見を交流できるようにする。(③) - 自己評価するコミュニケーションの項目を意識させる言葉掛けや、交互に意見を述べ合うよう、ルールを設定する。 <協同学習の要素や配慮事項> - 個人が責任をもって話し合いに参加するよう、グループの構成人数を2名にし、活発に意見交流ができるようにする。(②) <協同学習の要素や配慮事項> - コミュニケーションの評価表を丁寧に説明し、聞き手の態度（明るい表情やうなずき）によって話し合いが活発化したり、より良い人間関係が形成されたりすることを伝える。(④)	- プリント① - プリント② - プリント③
整理 7 分	- 話し合いでのコミュニケーションについて自己評価 - 全体発表 - 次回予告 - 終業挨拶	- 各項目に3段階（○△×）で評価する。 - ペアごとに、まとめた内容を発表する。 - 次回の授業内容を確認する。 - 日直に合わせて挨拶をする。	- 今後も継続して評価していくことを伝え、正直に自己評価するよう言葉掛けする。 <協同学習の要素や配慮事項> - コミュニケーション評価表で自己評価をし、その結果をペア内で交流する。(⑤) - ペアで協力して発表するよう促す。 - 次回の内容を伝える。 - 授業終了の合図をする。	自己評価表

5 指導上の工夫

① 互恵的な相互依存関係

単元の最後には、一人一人が相田みつをの技法を用い、詩を書くことを最終目標とすることで、学習に対する動機を図る。

グループ学習専用のワークシートを用意した。個人で行うワークシートでは設定していない項目を複数設定することで、仲間と協力して話し合うことで達成できる状況を作った。相手の話を傾聴し、意見をまとめることに課題のある生徒が多いことから、話し合いの前段で丁寧に指導していく。

② 対面的なやりとり

学習の中盤では、学習集団を2人1組に設定した。生徒の実態からできる限り少人数のグループによる活動を実施することで、生徒同士が助け合ったり、話し合ったり、教え合ったりできるようにする。

③ 個人としての責任

グループでの活動の前に個人で考えをまとめる時間を設定した。事前に自分の考えをまとめることで円滑な話し合いとなり、より良いグループでの意見交換になると考える。また、自分の考えを他者に伝えることで、その発言の責任感も学ばせる。

④ 協同学習スキル

話し合い活動の前に話を聞く側の指導を丁寧に行う。振り返りで行うコミュニケーションの項目表に触れながら、聞き手の態度（明るい表情やうなづき、目線）により、活発な話し合い活動が生まれ、その結果、円満な人間関係の構築につながることを指導していく。

⑤ チームの振り返り

聞き手のコミュニケーションに関わる項目表を作成し、まとめの際に自己評価の時間を設定する。聞き手としてのコミュニケーション力がホームルーム全体の課題であることを確認して取り組む。また、継続的に評価をしていくことを伝え、丁寧に記入するよう言葉掛けを行っていく。

6 指導の効果

学習の後半にグループで協力し、ワークシートを作成することを伝えた。そのことで、前半に行った個人ワークシートでは、グループ活動を意識し、責任を持って自分の考えを記入することができた。

グループでの話し合いの前に個人で詩についての考えをまとめさせることで、責任をもって自分の意見を他者に伝えることができた。また、グループを2名構成にすることで、他者に発言を任せることなく、積極的に話し合いに参加することができた。

他者の話を聞く態度について評価表を用いて学習を行ったが、事前にねらいを丁寧に伝えることで、ねらいを意識してお互いに話を聞いていた生徒が複数いた。また、自己評価をすることで自分の到達点を確認し、次回への課題を整理することができた。学習後においては、国語以外の形態においても、仲間の話を傾聴し、円滑な話し合いが行われている様子が見られるようになった。

今回の題材を通し、誰しもが知らぬ間に「セトモノ」になってしまっていることを全員が実体験と結びつけることができた。また、作詞の言葉のように、自戒の念をもって生活していくことが大切ということも学ぶことができた。

7 今後の課題

評価の項目で「うなづく」や「相手の目を見る」などがあったが、相手の話を聞きながらメモをとる生徒は複数いた。相手の顔を見ながら随時メモをとることは現段階では容易ではないこと

から、生徒の実態によって目標を変える必要がある。また評価表の項目については今回の国語だけではなく、どの指導形態においても継続して意識させることが必要である。

本題材では、生徒の日常で身近な人間関係と関連付け、実体験に結び付けて詩に親しむことができた。今後は相田みつをの手法を取り入れながら自作の詩を作成し、自分の考えや感じたことを表現できるよう、指導していく。

※ 授業を振り返って

授業前半の個人での学習に時間がかかり、協同学習の時間が少なくなってしまった。題材については生徒の反応も良く、普段の生活に関連するような内容であったため、授業の内容を精選する必要があった。

他者の話を聞く態度については、就労するために必要なスキルと感じている。したがって、国語科だけではなく、全授業で取り入れていき、継続した指導が必要と感じた。

協同学習を用いたことで、対教師だけの関わりでなく、仲間と関わったことで活発な意見交換を行うことができた。困難な課題であっても、仲間同士で意見を出し合い、協力していくことで、現状を打破し、さらに人間関係が良くなると考え、今後も横断的に指導していきたい。

実践レポート

単元・題材名 (授業名)	国語「相田みつをの詩を考える」 ～自分の実体験と重ねながら～ (詩について考え、意見を交流しよう)	生 徒	1 年生徒 8 名
		場 所	1 年窯業科教室
日 時	平成 29 年 12 月 11 日 (月) 5 校時	指 導 者	T1: 中市 T2: 高山

① 互恵的な相互依存関係

2 人 1 組 (以下「ペア」) で詩について感じたことなどを発表することと、人の話を聞く態度の 3 つについて復習し、授業内で再度実践することを本時の目標とした。各ペアにおいては事前の役割分担で円滑に発表することができた。また全授業での経験を活かし、ペアで協力して発表したり、聞き手の態度面の評価表をより意識したりして取り組むことができていた。

② 対面的なやりとり

評価表に記載されたポイントと反対の態度 (例: 目を見ない、無関心など) をとるよう、授業内で設定し取り組んだ。その結果、聞き手の態度次第で話し合いが円滑に進むことを全員が理解することができた。また、発表した班の内容を即座に全員で共有することで、詩の内容に関連付けた考え方や人との関り方についての新たな目標設定の発表を称賛し合うことができた。

③ 個人としての責任

ペアでの話し合いの前に個人で考えをまとめる時間を設定したことで、グループでのまとめも円滑に行うことができた。一人一人が相手に頼ることなく、自分の考えや感想を話し合いの場で発信することができた。また、発表者においては役割を事前に任されていたことで、責任を果たそうとする意欲が見え、それ以外の生徒は聞き手としての態度を守ることができた。

④ 協同学習スキル

②でも述べたが、聞き手が話し手に対して何らかの嫌悪感を出すことで、話し手の意欲を下げることをロールプレイで学ぶことができた。その後、評価表を意識して取り組んだ時には「話しやすかった」や「いい気持ちだった」と答える生徒が多くいた。このことについては、社会人としての重要なスキルであり、詩の内容と類似していることを全体で確認し、日常でも意識していくことを共有した。

⑤ チームの振り返り

詩については、各グループで発表した内容をその都度共有し、明日の生活から意識できることを確認することができた。自分たちも普段「セトモノ」のように仲間に対して辛く当たることもあるが、自戒の念を持って生きることが大事だと全員で確認することができた。また、評価表に関してはグループの仲間と自己評価を確認し合い、仲間の良かったところを評価し合うことができた。

実践レポート

単元・題材名 (授業名)	国語「まとめる・伝える」 (長い文章を要約する 第3回)	生 徒	2年生生徒8名
		場 所	美術室
日 時	平成 29 年7月 10 日(月)3校時	指 導 者	T1:矢倉

① 互恵的な相互依存関係

個々及び全員の読解力と要約力(知識・技能)を高められるよう、全員同じ新聞記事を読み、グループになって互いに協力し合って一つの要約文を作るという活動を取り入れた。最初に各自で新聞記事を読んで要約を考え、次にそれを持ち寄り、互いに意見を出し合いながら一つの要約文にまとめるという展開とした。本時はこの3回目であったが、回を重ねるごとに各自の要約力やコミュニケーション力の向上が見られ、みんなで一つのものを完成させようと主体的に学習する様子が見られた。

② 対面的なやりとり

話し合いの際に自分の考えを発言しやすい状況にするため、文章読解や要約についての理解の程度に近い生徒同士4名を1グループとした。Aグループは理解の程度が比較的高い生徒4名、Bグループは比較的低い4名とした。こうすることで、4名の中で話し合いがスムーズに進み、一つの要約文を作るという活動は順調に行われた。

③ 個人としての責任

自分の考えを持って話し合いに参加させるために、話し合いの前に各自で新聞記事を読み、段落ごとに要約を考えさせ、ワークシートに記入させた。Aグループの生徒は読解力と作文力があるため、「その段落にはどこで何がどうなったと書いてあるか」など、要約すべき部分に注目できるようなヒントを載せた。Bグループの生徒は読解力・要約力ともに課題があるため、教師が作成した要約文に空欄を設け、文章中から要点となる単語を抜き出して穴埋めをするという方式にした。このように両グループの生徒の理解度に合わせた教材を用意したことで、全員が自分の力で読解や要約に取り組み、自分の答えを持った上で話し合いに臨むことができた。

話し合いの際は、自分の答えを必ず発言すること、進行、書記、発表というように役割を分担してから行うことを指示した。それぞれの役割や話し合い自体に苦手意識がある生徒に対しては、教師がその都度助言をしたり、よくできたときに評価したりすることで、話し合いの仕方は徐々に上達したと思われる。しかし、教師1名で両グループの進捗状況に合わせて適切な指導・支援を行うには物理的な限界があるため、今後はグルーピングや教材を工夫していく。

④ 協同学習スキル

根拠を述べず感情的に自己主張する生徒がいたり、意見が対立したときに直接的な言葉を使ってしまう傾向が全体的に見受けられたりする。そのため、話し合いのルールとして「自分の意見に理由をつける。」「相手の考えをばかにしたり、否定したりしない。」(コミュニケーションスキルの3と12)の2つを提示した。おおむね守られていたが、意見が対立したときには冷静さを欠いて守られないこともあり、教師の仲介が必要だった。こうした場面における対応について、今後時間を設けて指導していく。

⑤ チームの振り返り

各グループで作った要約を発表する時間を設け、互いの要約が相手に分かりやすいものになっているか評価を述べさせ、教師からの講評を伝えた。加えて、話し合いが上手に行えたかどうか発表させ、教師からの講評も伝えた。しかし、話し合いの時間が長くなったため、簡単な振り返りとなり、次回に生かすポイントまでは共有できなかった。今後は展開の内容や時間配分を見直して、次につなげる振り返りができるようにする。

2 学年 国語科 学習指導案

単元・題材名 (授業名)	グループディスカッション (話し合いをしよう 第3回)	生 徒	習熟度別グループ(1G) 8名
		場 所	美術室
日 時	平成29年10月16日(月)3校時	指 導 者	T1:矢倉

1 授業のねらい

(単元の目標)

- ・文章の内容を理解し、筋道を立てて自分の意見を述べることができる。
- ・相手の意見を理解し、自分の考えと照らし合わせながら話し合うことができる。

(本時の目標)

- ・仲間の意見に対して意見や質問をすることで、具体的な話し合いをすることができる。
- ・前時の振り返りを踏まえて、発言や話し合いの仕方を改善することができる。

2 生徒について

- ・長文読解を得意とする生徒と、短文なら読解できる程度の生徒が4名ずつ在籍している。
- ・自分の意見に理由をつけて発言する方法を学習しているが、適切にできる生徒と難しい生徒が混在しており、難しい生徒は自主的な発言にも消極的である。集団の構成によって、「できる」「できない」が左右される場合もある。
- ・感情的に自己主張したり、不満があるときに直接的な言動をとってしまう生徒がいる。

3 指導計画

- 第1回 9月13日 : 話し合いの仕方①(理由をつけて意見を述べる、発言時の言い方)
- 第2回 9月25日 : 話し合いの仕方②(話し合いの練習)
- 第3回 10月 2日 : 話し合いをしよう第1回
(新聞の投稿欄を読み自分の意見を述べる、以下第6回まで同様)
- 第4回 10月11日 : 話し合いをしよう第2回
- 第5回 10月16日 : 話し合いをしよう第3回(本時)
- 第6回 10月18日 : 話し合いをしよう第4回
- 第7回 10月23日 : 話し合いをしよう第5回
- 第8回 10月25日 : 話し合いをしよう第6回

4 本時の展開

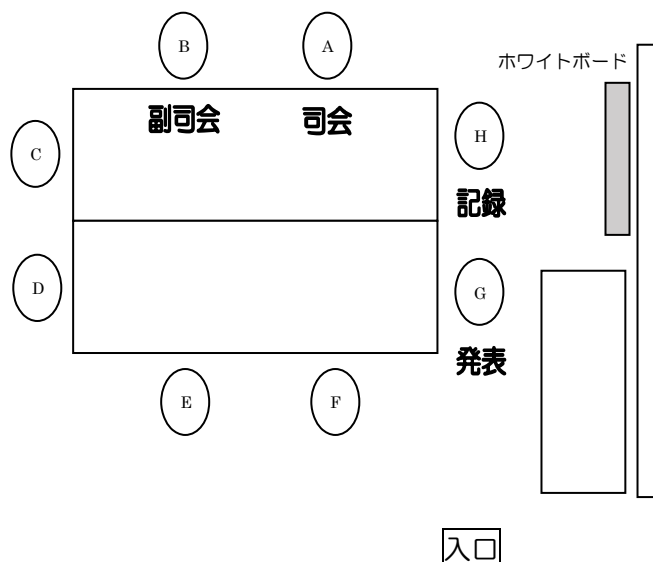
	学習活動	生徒の活動	教師の活動	教材教具
導入 5分	・始業挨拶 ・本時の説明 ・前時の復習	・日直に合わせ挨拶する。 ・本時の学習内容と流れについて理解する。 ・前時の話し合いのよかった点と課題点について確認し、本時の目標を知る。	・日直に号令をかけさせる。 ・前時と活動の流れが同じであることを確認させる。 ・前時の振り返りシートを見るよう促し、話し合い時の各自の目標と全員の目標を確認させ、全員の目標は板書する。	・前時の振り返りシート ・黒板
<協同学習の要素や配慮事項> ・目標を共有できるよう丁寧に振り返り、本時の目標を説明、板書して、協力して課題解決しようとする意欲を高める。(①)				

展開 30分	- 文章読解 (10:40) - 意見をまとめる (10:45) - 話し合い (10:50) (10:51)	- 文章を読む。 - 筆者の考えをまとめる。 - 筆者の考えを共有する。 - 筆者の考えと自分の経験を踏まえ、自分はどうに考えるのか、意見と理由をまとめる。 - 役割分担をする。 - 話し合いを行う。	- 生徒Cに全文を読ませる。 - 空欄を埋めさせる。各自考えたあと、周囲の仲間と答えを確認させる。 ＜協同学習の要素や配慮事項＞ - 解答をともに考え、教え合い、助け合いの時間を設ける。(②) - 発問し、答え合わせをする。 - 意見に対する理由を明確にさせるが、生徒の理解度に合わせた回答欄を設ける。相手に分かりやすくまとめられているか確認し助言する。 8人全員で話し合いを行う。役割はローテーションで決めておいたとおりとし、簡単に役割を確認するほか、一人1回以上発言するという条件も確認する。 ＜協同学習の要素や配慮事項＞ - 話し合いや発言が得意な生徒と苦手な生徒を同じグループにすることで助け合いを促す。(②) - 個々の役割を明確にさせる。(③) - 進行手順表をもとに司会に話し合いを進めさせる。 - 記録はホワイトボードに記入させる。必要に応じ教師が補助する。 ＜協同学習の要素や配慮事項＞ - 話し合いの流れや結論を視覚化し共有できるようにする。(配慮⑬) - 必要に応じてメモをとらせる。 - 各自自分の意見を述べさせる。 - 他者の意見に対する意見や質問を述べさせる。 ＜協同学習の要素や配慮事項＞ - 話す目的や場に応じた言い方で話すよう促し、不適切な場合は教師が改善のポイントを示し、言い直しさせる。(④、配慮⑨)	- 課題用紙 - 役割表示 - 進行手順表 - ホワイトボード
-------------------	--	---	---	--

	(11:08)		<協同学習の要素や配慮事項> ・うまく発言や進行ができた場合は、そのポイントを全体に伝えた上で称賛する。(配慮⑩⑪) ・話し合いの結果を発表させる。	
整理 10分	・振り返り ・次時予告 ・終業挨拶	・振り返りシートを記入し、本時の話し合いや発言について自己評価する。 ・自己評価について発表し、他者へのアドバイスがあれば述べる。 ・教師の講評を聞いて、次回の話し合いに向けた改善点を理解する。 ・次回の学習内容を知る。 ・日直に合わせ挨拶する。	・次回どうするかについても考えて書かせる。 ・自己評価は総合的にどうだったかを発問する。アドバイスを受けた場合はメモするよう促す。 ・次回に向けた教師からの助言をメモさせる。 <協同学習の要素や配慮事項> ・今回の状況を振り返らせ、どのようにすると次回よりよい話し合いや発言ができるかを考えさせる。(⑤) ・別の話題で話し合いを行うことを伝える。 ・本時の学習プリントを全て回収する。 ・日直に号令をかけさせる。	・本時の振り返りシート

補足：配置図等

	役割・実態
A	司会：まとめ役に慣れているが感情が入る
B	副司会：理解していても自発的活動が少ない
C	理解しても考えのまとめや筆記に時間がかかる
D	4人集団では進行や発言がややできる
E	理解していても発言が少なく活動全般に消極的
F	独自の理解で突飛な発言をすることがある
G	発表：臨機応変な対応にやや課題あり
H	記録：多様な視点で物事を捉え、発言できる



5 指導上の工夫

① 互恵的な相互依存関係

生徒全員がそれぞれの課題や役割を意識するとともに、本時の話し合いを良いものにしようと心掛けることができるような工夫を盛り込んだ。まず、前時の話し合いの結果（課題）を踏まえて、本時の話し合いで気をつけるべき点を目標として板書することで、全員が目標を達成しようとする意識付けを図る。また、「話し合いの心得」として毎時掲げている注意点も提示する。

また、複数かつ多様な意見を一つにまとめるよう意識付けさせる工夫として、話し合いの際は、話の流れを生徒全員が分かるようにホワイトボードに記録を書かせ、類似する意見や異なる意見があることを視覚的に示すようにした。また、話し合いのまとめをするのは司会や発表に限らず誰でも構わないことを伝え、生徒全員で協力し合って一つの結論を出そうという意識を持たせるようにした。

② 対面的なやりとり

生徒8名の読解力やコミュニケーション力には差があるが、個々の得意不得意を互いにカバーし合えるような関係づくりを目指し、あえて8名全員を1グループとして話し合いに取り組ませることにした。読解や発言が苦手な生徒には、得意な生徒が声を掛けるよう教師が言葉掛けをしながら授業を進める。

③ 個人としての責任

生徒全員に明確な役割を与え、活動への参加が難しい生徒が出ないように工夫した。司会は話し合いを進行する役、副司会は司会を助けタイムキーパーを務める役、記録は全員に分かりやすく意見等をホワイトボードに記入する役、発表は話し合いの結果を自分の言葉で簡潔にまとめて発表する役である。この4役に当たらない4名の生徒には、話の流れに沿って積極的に発言することを役割として意識付けた。また、全員1回以上は発言をするという条件を設けた。

④ 協同学習スキル

コミュニケーションスキルを伸長するよう、教師の言葉掛けを工夫する。相手を不快にさせるような言い方があった場合は、事前に学習済みの「オープンクエスチョン」をすることや「ふわふわ言葉」を使うように促し、他に言い方がないかどうか考えさせる。発言が消極的になっている場面では、司会に指示して進行手順表をもとに発言を促す進行をさせる。また、言い方が分からなかったり考えがまとまらなかったりする生徒がいた場合は、個別に言葉掛けをして自ら考えられるような働きかけをする。

⑤ チームの振り返り

授業の最後に「話し合い振り返りシート」に取り組ませる。これを用いて、自分の役割は果たせたか、適切な言い方で1回以上発言できたかなどを自己評価させる。また、生徒や教師からの他者評価を受けることにもよって、自分のどこがよかったか、改善すべきところは何かを明確にさせる。さらに、教師が本時全体について講評を伝えることで、8名の集団としてのよかったところを称賛するとともに、次の話し合いの際に改善すべきところを明確にし、次時の目標へとつなげる。

6 指導の効果

まず、導入の段階で、本時の話し合いで気をつけるべき点を目標として提示したこと、さらに話し合いを展開させる前にも再度確認したことで、全員が目標を意識して活動することができた。

また、8名全員を1グループとしてその後の活動に臨んだが、数回行っていることもあり、授業の流れや助け合う場面などは理解し、主体的に活動することができていた。例えば、話し合いのもととする文章の読解に取り組ませたときである。今回は、生徒と同年代の学生が投稿した『中堅学年2年生、今度は後輩を導く』という記事を読み、穴埋め式の問題を解くことで筆者の考えを要約させた。各自で解答した後、教師の言葉掛けをきっかけに周囲で解答を確認する様子が見られ、仲間と共に学ぶという意識付けができてきたと考える。

その後の話し合い活動では、一人一人が与えられた役割を理解し、教師や仲間の助言を得ながら役割を果たそうと努力していた。また、全員が一人1回以上発言することもできたことから、個人としての責任は果たしていたと考える。さらには、本時の目標とした「仲間の意見に対して質問や意見をする」ことや、それに対する応答もできていた。

また、どの生徒の発言を聞いても、以前見られたような相手を不快にさせる言い方や、攻撃的な言い方がほぼ見られなかった。過去の授業で繰り返し指導してきたことから、話し合いという場面における言葉の使い方を考えるようになってきたのではないかと考えられる。ただし、思うように言葉が出なかったり、質問の内容が理解できなかったりした生徒もいた。このような場合は、教師からの言葉掛けによって、適切な言葉で活動に参加することができた。

振り返りの活動では、どのように自己評価をしたか尋ねたところ、「今回の話し合いは良くできた。」と答えており、たくさん発言したり、授業の目標を達成したりできたと答える生徒がいた。練習を含めて過去3回の話し合いにおいても、小さなことでも「できた」という経験を積み重ねていることを生徒にフィードバックさせている。「できなかった」ことについては、振り返りシートに教師がコメントすることで個別に助言を行っている。こうした積み重ねにより、次の活動に対する意欲や意識を持たせることができ、その成果として今回の話し合いが成り立っていたのではないと思われる。

7 今後の課題

今後3回、同じ活動を続けることになるため、マンネリ化しないような工夫が必要である。話し合いのもととする文章の内容も、できるだけ生徒の実生活に関連したものにするなどして、自分の生活と照らし合わせて意見をまとめられるようにする。ただし、その際の問いや、話し合いのテーマについては、抽象的なものにしない方がよい。今回は「後輩のために、先輩として、どうしたらよいか」としたが、具体的な例や理由をつけた意見をまとめることができた生徒は少数だった。今後は生徒の実態を考慮して、具体的な意見を書きやすいような問いや、賛成・反対によって意見と理由を表明できるような問いを設定するようにする。

話し合いの最中は、教師がフォローを入れる場面がいくつかあった。司会が進行の仕方に困っている場面が多かったほか、同じような意見が出たときに自分から挙手するよう促した場面、話が端的に要約されていないため教師がそれをしてしまった場面などである。時間の制約もあったため、教師が正解へと導いてしまったため、生徒同士の助け合いによる学び合いを促すことができなかった。「先輩」「後輩」にどのように話すかについて話し合う場面では、図解するなどして丁寧に確認すべきだった。こうした困難な生徒や状況に対して、生徒が主体的に学び解決できるようにする必要がある。具体的には、普段から他者が担っている役割をよく観察しておくよう言葉掛けをする、生徒が自ら考えるきっかけとなるような言葉を選んで言葉掛けをするといった、教師の働きかけの改善が必要である。さらに、グループを細分化して活動させる時間を設ける、他者評価を受ける場面をしっかりと設定するといった、授業展開の工夫が必要である。

※ 授業を振り返って

1学期に行った要約の学習も協同学習として行ったため、課題に対して全員で取り組み解決するという基本的な意識は定着していると感じた。また、その要約の学習を踏まえて筆者の考えを要約できたことも、学習の成果と捉えることができる。協同学習という授業のスタイルを継続すること、指導内容に系統性を持たせて授業を構成・展開していくことの重要性を改めて認識することができた。

一方で、教師の働きかけによってその成果が左右されるということも痛感した。特に、互恵的な相互依存関係を構築するための導入、活動を経て行うチームの振り返りによって、その授業で何を学ぶか・学んだかを生徒自身に意識させることで学習に対する意欲や理解の向上が図られると思われる。また、協同学習スキルに関する指導においては、生徒自身に課題点を改めさせるためのヒントを与えるようにすることで思考力・判断力・表現力を向上させられると思われる。以上を踏まえて、今後も授業づくりや指導方法の改善と充実を図りたい。

実践レポート

単元・題材名 (授業名)	国語「グループディスカッション」 (話し合いをしよう 第6回)	生 徒	2年生徒8名(うち3名欠席)
		場 所	美術室
日 時	平成 29 年 10 月 25 日(水)2校時	指 導 者	T1:矢倉

① 互恵的な相互依存関係

個々及び全員の発言力(理由をつけて意見を言う)を高められるよう、生徒自身が考えた共通の話題「学校に対する要望」について話し合いをさせる活動を取り入れた。授業の導入において、本時のテーマや前時までの話し合いの様子を踏まえて「相手の理解を得られるような理由を述べる」という本時の目標を提示し、話し合いに入る前にも再確認させた。このことにより、話し合いは、全員で相手を納得させるためにより根拠のある理由を考え、互いの意見に対して質問や意見を重ねることで議論を深め、まとめていた。また、今回のような活動は7回目であったが、回を重ねるごとにこのような各自の発言力の向上が見られたほか、みんなで一つの答え(話し合いのまとめ)を導き出そうという様子が見られた。

② 対面的なやりとり

意見・質問といった発言が得意な生徒もいれば、苦手な生徒もいる。そうした生徒をあえて一つのグループにし、苦手な生徒には、得意な生徒が声を掛けるよう教師が言葉掛けをしながら授業を進めた。また、話し合いの際に困っている生徒がいたら、周囲の生徒が助けるように言葉掛けをした。すると、ある生徒が自分の意見や理由をうまく要約して言えなかったとき、別の生徒が「つまりこういうこと？」などと声を掛け、その生徒は伝えたいことを伝えることができた。このような助け合いが生まれ、生徒の力で話し合いを進めることができた。

③ 個人としての責任

司会、副司会、記録、発表といった4つの役割をローテーションで生徒に割り当てた。残りの4名は、話の流れに沿って積極的に発言することを役割として意識付けた。この4役は一人1回しか当たらないが、これとは別に全員1回以上は発言をするという条件(役割)を設けた。

生徒が役割を果たそうとしてつまずいたときには、生徒自身が考えて解決できるように教師がヒントを与える形で考え方を助言した。また、前時までに他の役割の生徒の様子を事前によく見ておくように伝えた。

その結果、記録以外の生徒は自分の役割をつまづくことなく果たすことができた。記録の生徒は、発言内容を要約して速記することが追いつかずに困っていたが、自分自身でも考えたほか、他者から助言を受けることで役割を果たすことができた。また、他者意見に共感し発言を重ねる生徒が多く、全員1回以上は発言するという条件も満たされ、話し合いは深まっていった。

④ 協同学習スキル

相手を不快にさせるような言い方があった場合や、相手に伝わりにくい言い方があった場合、また本時の目標である「相手の理解を得られるような理由を述べる」ことができていない場合は、どのような言い方が望ましいのか教師が助言することにした。ただし、話し合いが円滑でないからといって、教師が考える正解を提示するのではなく、あえて静観したり、生徒自身に考えさせる言葉掛けをしたりするように意識した。

その結果、不適切な言い方はなく、的確に話せていない場面では生徒同士で解決することができていた。しかし、話し合いのまとめになると、複数の意見の中から類似のものをカテゴライズし、一文にまとめることに苦慮していた。例を挙げてまとめ方を伝え、これも生徒同士で考えて解決することができていた。また、よくできたときに即時評価して伝えることで、次の話し合いも活気のあるものへとつながっていった。

⑤ チームの振り返り

授業の最後に「話し合い振り返りシート」に取り組ませ、本時の話し合いで役割を果たせたか、適切な言い方で1回以上発言できたかなどを自己評価させ、生徒や教師からの他者評価も受ける場面を設けた。こうすることで、生徒個々に成長と課題を認識させることができた。また、教師が本時の目標が達成できたかという観点を中心に話し合い全体の講評を伝えることで、集団としての成長と課題を認識させることができた。

実践レポート

単元・題材名 (授業名)	詩の学習 隠された歌詞を推理しよう①～歌全体 からイメージしよう	生 徒	3 年生徒16名
		場 所	柔剣道場
日 時	平成29年7月18日(火)2校時	指 導 者	T1:田中

① 互恵的な相互依存関係

今回の授業は、空欄設定法を活用し、言語活動と協同学習の充実を図ることを目的とした国語科の授業である。歌詞の核心の部分空欄にして提示し、周りにある歌詞の言葉からイメージをつなげて膨らませ、他の生徒と予想した言葉を交流しながら、それがどんな言葉なのか(イメージなのか)、自分の考えを決めようという学習活動のながれを設定した。

18日の授業場面では、生徒にもなじみの深い言葉を答えに設定したことと、詩の内容も平易であることから、生徒からはそれぞれの目標グループに応じて、心情的な言葉やイメージを導き出すことができた。次回もこのおさえを継続し、難易度を若干上げたい(複数か所に空欄設定)。

② 対面的なやりとり

自分の考えとともに、相手の考えも大切にしたい。そのため、グループでの学び合い(協同学習)に当たっては、担任の力を借り、学科を超えて言葉に対するイメージ力が同程度となるようなグルーピングとなるよう心がけ、各グループ内で支え合い、または教師が支援できるようにした。

18日の授業場面では、グループ内相互に生徒同士が考えを交流する場面がみられ、正答に近く生徒も数名いた。次回もこの組み合わせを継続して実施したい。

③ 個人としての責任

他者の意見の模倣や追従するのではなく、自分のイメージを自分の言葉で考える場を設定した。18日の授業場面では、ほぼ全生徒が自分の意見やイメージをワークシートと付箋に書くことができ、自分の意見と理由を書いて、グループ内、または全体に発表することができた。次回もこの方法を継続して指導したい。

④ 協同学習スキル

実態に近い生徒どうしのペア、グループの中で、自分(個人)の考えを伝え、交流するように指導した。また、考えの交流を通して自分の意見がどうなったか、シートへの記載で検証した。

結果として「自分の意見は変わらない」という考えも尊重することとした。

18日の授業場面では、グループ内での交流の後、(16名のうち)9名の生徒が意見を修正した。修正しなかった生徒も7名おり、変わる・変わらない双方の選択を尊重することができた。

今回の授業もこの方法を継続して指導したい。

⑤ チームの振り返り

18日の授業では、展開部後半においてホワイトボードに生徒ひとりひとりが付箋を貼り付け、全体で確認する場を設定することにより、各グループの考えの再確認と全体での情報共有を図ることができた。次回もこの方法で、生徒が他の生徒の考えを共有できるように指導したい。

3 学年 国語科 学習指導案

単元・題材名 (授業名)	詩の学習 「隠された言葉を推理しよう」 ～全体からイメージしよう	生 徒	全学科 3 年生徒 20 名
		場 所	視聴覚室
日 時	平成 30 年 1 月 23 日(火)2 校時	指 導 者	T1:田中博 T2:鐘ヶ江 T3:岩城 T1:亀田 T2:初山 T3:石川

1 授業のねらい

(単元の目標)

- ・歌詞もしくは詩をイメージして、抜けている言葉を推理することができる。
- ・推理したイメージや言葉を自分の言葉で、または周囲の生徒の考えを参考に発表することができる。

(本時の目標)

- I 正解及びそれに近い言葉による説明をねらう生徒 11 名
 - ・詩の流れから、隠された言葉のヒントとなる部分を見つけることができる。
 - ・詩の流れから、隠された言葉およびそれに近い言葉を予想することができる。
 - ・隠された言葉及び根拠となる言葉など、連想できるイメージを自分の言葉で説明しようとするすることができる。
- II 正解に近いイメージを自分の言葉で説明できることをねらう生徒 9 名
 - ・詩の流れから、隠された言葉のヒントとなる部分を見つけることができる。
 - ・詩の流れから正解となる言葉のイメージを予想し(「こんな感じの言葉」のような)説明をすることができる。
 - ・隠された言葉に関連、連想したイメージを自分の言葉で説明しようとするすることができる。

2 生徒について

- ・対象の生徒は、3 年産業科、農業科、生活家庭科 20 名である。
- ・実態については、4 月に行ったレディネステスト及びアンケート(質問紙)の結果によると、国語の力(漢字の読み書き、文法等)に関する生徒の実際の能力について、各学科をまたいで高低が混在しており、単純に学科単位でグループ分けすることが、生徒の実態を踏まえたことにはならない。
- ・したがって、今回のように学年全体での指導をする場合、実年齢に対して、小学校低学年～生活年齢相応のレベルに至る幅広い語彙年齢の生徒が存在することから、言語理解並びに言葉を使いこなす力について、実態差がかなり広い学習集団になる。そのため、指導に当たっては、目標の複数化や実態差によるグループ化をした。

3 指導計画

- 第 1 回 7 月 18 日：ワークシートを使い、歌詞で抜けている部分に入る言葉を予想①
- 第 2 回 7 月 25 日：ワークシートを使い、詩で抜けている部分に入る言葉を予想②
- 第 3 回 12 月 22 日：ワークシートを使い、歌詞で抜けている部分に入る言葉を予想③
- 第 4 回 1 月 25 日：ワークシートを使い、歌詞で抜けている部分に入る言葉を予想④(本時)

4 本時の展開

	学習活動	生徒の活動	教師の活動	教材教具
導入 5分	・ 整列 ・ 挨拶 ・ 出席確認 ・ 本時の説明	・ 学習の準備をし、正しい姿勢で挨拶する。	・ 農業科日直を指名 ・ 本時の活動である「隠された歌詞にあたる言葉を予想する」学習であることを説明する。 ＜協同学習の要素や配慮事項＞ ・ 生徒の特性を考慮し、授業の流れる形を固定し、繰り返して指導する。 (配慮①⑫) ・ 実態別に生徒の達成目標を2本立てており、それぞれの基準で生徒を評価する。 (配慮②) ・ ワークシートを使って自分の考えを出すまでの過程が見える様式を用意する。 (配慮⑦⑭⑮)	・ ワークシート1・2 ・ 付箋

展開 40 分	・課題へのアプローチⅠ ◆個人 ◆個人→グループ ◆グループ→全体 ・課題へのアプローチⅡ ◆全体→個人 ・正解を確認する	・「うれしくてさみしい日」を視聴する。 ・自分が予想した言葉、もしくはイメージを付箋に書く。 ・グループ内で考えを交流する。 ・理由が気になったグループ内の意見をメモする。 ・各グループの発表を聞く。 ・理由が気になった他グループの意見をメモする。 ・発表したら、付箋をボードに貼る。 ・各グループの発表を聞いたり、黒板に貼られた他のグループの付箋を見て、自分の意見を確定する。 ・「うれしくてさみしい日」を再度、視聴する。	・動画を観るよう指示する。 ・ワークシートと付箋に書くように指示する。 ・グループの中で考えを交流するように指示する。また、気になる意見はワークシートにメモしておくように指示する。 (進め方はグループ内で決定) <協同学習の要素や配慮事項> ・生徒の言語能力の特性を考慮したグループ毎に学習する。(配慮③⑧) ・付箋を用いて、まわりに自分の考えを伝える。(配慮④⑤) ・曲と動画、ワークシートによる生徒への視覚支援を行う。(配慮⑬⑭) ・机間指導の中で評価する(配慮⑨⑩) ・ホワイトボードを見て、改めて自分の予想した考えをワークシートに書くよう指示する。席を立てて見に行っても良いことを指示する。 ・動画を観るように指示する。 <協同学習の要素や配慮事項> ・同じ程度の言語スキルのある生徒をグループにし、過度な意見の同調や強制がないようにしている。(配慮③④⑤) ・付箋やワークシートを使い、チームや個人の目標達成までの状況が見えるようにする。(配慮⑥) ・生徒の実態を踏まえ、ホワイトボード等を利用して視覚的提示する。(配慮⑬)	・ワークシート1 ・PC テレビ ・動画は予想させる歌詞の部分を消音加工したものを使用する。 ・付箋 ・PC テレビ ・動画は、加工しないものを使用する。
------------------------	--	---	--	---

整理 5分	今日の授業を振り返る	- 筆記用具、プリントをしまい、机上进行整理する。 - 姿勢を正して挨拶する。	- 今日の正答へのアプローチの度合いについて講評する。 - 農業科日直を指名する。 ＜協同学習の要素慮事項＞ - 全体から個に返して考えることで自分の言葉の力に合わせた自己決定ができる (配慮③) - 付箋やワークシート等を使い、チームや個人の目標達成までの状況を把握できるようにする。(配慮⑥) - 生徒の実態を踏まえ、ホワイトボード等を利用して視覚的提示する。(配慮⑬)	
----------	--	--	--	--

5 指導上の工夫

① 互恵的な相互依存関係

自分の考えとともに、相手の考えも大切にしたい。そのため、グループでの学び合い(協同学習)に当たっては、担任の力を借り、学科を越えて言葉に対するイメージ力が同程度となるようなグルーピングとなるよう心掛ける。そうすることで、生徒が同じグループの他のメンバーの考えと自分の考えとを比較し、他者の考えを通して自分の考えを検討しやすくなる。

② 対面的なやりとり

他者の意見の模倣や追従するのではなく、自分の考えを自分の言葉で、グループのメンバーに伝える場を設定する。そうすることで、自分の考えが不明瞭だった生徒が他のメンバーの考えを参考に自分の考えをはっきりとさせたり、自分の意見を変更する、しないを決めることができる。

③ 個人としての責任

グループの中で、自分(個人)の考えたことを、理由と合わせて説明することで、自分の考えは根拠(責任)のある意見、という自覚を持つことができる。また同じ意味で、付箋を使うことで他者と同じ意見であっても「自分の考え」として、目に見える形で自の意見を残せるようにする。最終的に「自分の意見は変わらない」という考えを生徒がしても、それを尊重する。

④ 協同学習スキル

今回の授業は、空欄設定法を利用し、言語活動と協同学習の充実を図ることを目的とした国語科の授業である。詩(歌詞)の核心の部分空欄にして提示し、周りにある歌詞の言葉からイメージをつなげて膨らませ、他の生徒と予想を交流しながら、それがどんな言葉なのか(イメージなのか)、自分の考えを決めようという学習活動であり、特に、グループと全体で考えを交流し、生徒が他のメンバーの意見を聞きながら、最終的な自分の考えを決めていく段階を設定するところが協同学習スキルを生かす場面としている。

⑤ チームの振り返り

展開部において各チームの生徒(代表発表を予定)が、全体に発表する場を設定することにより、各グループの考えの再確認と全体での情報共有を図る。

6 指導の効果

空欄補充法は、課題を明確に焦点化することができるので、知的障がいのある生徒にも課題解決の意識をもたせやすい課題提示の手法である。

生徒の意見を正解に合わせる「ピンポイント」の課題解決ではなく、正解も含めた「ピンポイント＋ゾーン」の正解域の設定をすることで、生徒も間違いを恐れずに自分の考えをもつことができる。

自分の考えをグループや全体の意見の中で検討することを通して、自分の考えを変えることや、または変えないことを体験することは、対人コミュニケーションを充実させるという意味で就労後のスキルにも通じるものがある。

歌やJ-POP等、生徒のよく聴く音楽を選ぶことで、生徒の興味関心を引くことができる。

7 今後の課題

生徒の実態に応じた内容であることや流行り過ぎて全員が知っていないこと、テンポが速過ぎない曲であること等、選曲の仕方が難しい。

今回は、生徒の課題でもある「対人関係」から、「他者意識」「人の生き方」に主題を置いて選曲した。このように単元の授業のテーマを設定し、生徒の実態を踏まえて「テーマ性のある」曲から意図を持って選曲したが、実際に選曲してみると、使用できる（＝使用に耐えうる）楽曲は、そんなに多くはないことが分かった。

授業の中で、もっとT2～5の役割を明確にしておく必要があった。どこまでヒントを与えていいか等、事前の役割と生徒への介入の度合いに関わる打ちあわせが必要である。

※ 授業を振り返って

今回は、4時間目（4回目）にあたる授業のため、生徒も、課題や基本的な流れを見通して言葉を予想する学習に対する「構え」ができており、言葉をイメージするまでの思考パターンがほぼできあがっていた。

また、協同学習の側面についても、生徒相互の思考の練り合いというかたちで毎時間設定し、生徒同士での学び合いの場として位置付けることができた。その中で、「できる・できない」という能力的な意識ではなく、まず「考えてみよう」という「主体的な課題解決意識」を引き出すことができた。その結果、生徒は自然に、「自分の考えの根拠」（＝責任をもって対外的に主張できる意見）をもつことができた。

一方で、テーマ設定、選曲が難しかったが、生徒に身近な分かりやすい曲を選んで課題とすることができた。

実践レポート

単元・題材名 (授業名)	詩の学習 隠された歌詞を推理しよう⑤～歌全体 からイメージしよう	生 徒	3 年生徒 20 名
		場 所	視聴覚室
日 時	平成 30 年 1 月 25 日(木)2校時	指 導 者	T1:田中

① 互恵的な相互依存関係

今回の授業は、空欄設定法を活用し、言語活動と協同学習の充実を図ることを目的とした国語科の授業であった。歌詞の核心の部分を空欄にして提示し、周りにある歌詞の言葉からイメージをつなげて膨らませ、他の生徒と予想した言葉进行交流しながら、それがどんな言葉なのか(イメージなのか)、自分の考えを決めるかたちで学習活動のながれを設定した。

今回の授業場面では、5回目の授業であることから、生徒が授業全体の見通しを持って参加できた。生徒にもなじみの深い詩の中に空欄を設定し、詩の内容に一部難しい表現があったものの、生徒からは詩の言葉の流れを追って、それぞれの目標グループの実態に応じて、空欄に入る言葉そのものや、イメージを導き出すことができた。

② 対面的なやりとり

自分の考えとともに、相手の考えも大切にするため、グループでの学び合い(協同学習)に当たっては、担任の力を借り、学科を越えて言葉に対するイメージ力が同程度となるようなグルーピングとなるようにし、各グループ内で支え合い、または教師が支援できるようにした。25日の授業場面では、グループ内相互に生徒同士が考え进行交流する場面がみられ、正答に近づく生徒も7名いた。回を重ねるごとに正答に近くなる生徒数が増え、効果が実証されたものとする。

③ 個人としての責任

他者の意見の模倣や追従するのではなく、自分のイメージを自分の言葉で考える場を設定した。

今回の授業場面では、全生徒が自分の意見やイメージをワークシートと付箋に書くことができ自分の意見と理由を書いて、グループ内、または全体に発表することができた。自分の考えが他の生徒と同じで安心したり、自分の気が付かない答えをみて、自分で答えを修正したりするなど、自己選択、自己決定の場面がどの授業でもみられた。

④ 協同学習スキル

実態に近い生徒同士のペア、グループの中で、自分(個人)の考えを伝え、交流するようにした。また、考えの交流を通して自分の意見がどうなったか、シートへの記載で検証した。結果として「自分の意見は変わらない」という考えも尊重することとした。

今回の授業場面では、グループ内での交流の後、(20名のうち)15名の生徒が意見を修正した。修正しなかった生徒も5名おり、変わる・変わらない双方の選択を尊重することができた。

今回、のべ5回の授業を通してみて、複数の課題を設定する場合、最大2つまでは空欄として設定できるものと考えられる。

⑤ チームの振り返り

今回の授業では、展開部においてホワイトボードに生徒ひとりひとりが付箋を貼り付け、全体で確認する場を設定することにより、各グループの考えの再確認と全体での情報共有を図ることができた。答えの数を一つに絞り込むことで、生徒の意見もある程度、収れんされ全体の意見を生徒が見渡せることができた。

まとめのレポート

教科・形態名	国語科	部会メンバー	小原、矢倉、田中博
--------	-----	--------	-----------

（１）国語の指導内容や特性

国語科の指導内容としては、「二つの言語力」の育成を目指すという視点がある。

まず、「基礎教科としての言語力(漢字の読み書き、場面や状況を的確に説明したり、要約したりする力、文法力など)」、そして「就労につながる言語力(コミュニケーション力、敬語や礼状などの社会生活力)」である。

知的障がいの生徒は、障がいや発達の偏り等に伴う学習内容の定着の困難さに加え、小、中学校時代に不登校だったり、教科書を使わない指導を受けてきたりするなど、様々な学習形態を経験した生徒が多い。したがって、それら二つの言語力が身に付いていなかったり、使い方を間違っていたりするケースが多い。その状況に対し、学び直しも含めた指導をする上では、思い切った指導内容の精選や焦点化をする必要がある。

また、特別支援学校における国語科の特性として、指導内容が他の学習場面や寄宿舎の活動場面など、生徒の生活との間で深い相関関係があり、加えて生徒の卒業後の余暇、就労や実習先での評価に直結すること多いため、指導にあたっては、深く広い先見性が必要となる教科である。

（２）国語における協同学習の授業づくり

1 相互的な相互依存関係

- ・「意見を聞いてまとめる活動」を取り入れた学習場面を設定し、生徒が相互に情報を交流することで学習に参加できる授業スタイルを作る。
- ・全員同じ新聞記事を読み、グループになって相互の考えを合わせ、修正しながら一つの要約文に作り上げる学習活動を設定する。
- ・詩の学習で、歌詞の核心の部分空欄にして提示し、他の生徒と予想した言葉を交流しながら、それがどんな言葉やイメージなのか、自分の考えをまとめ、正解に迫る。

2 対面的なやりとり

- ・学習集団をペアと小グループの複数体制で設定し、相互に議論する。
- ・オープンエンドの発問を入れることで、生徒が「間違い」を恐れることなく自分の考えを発表し合う。

3 個人としての責任

- ・理解の程度やイメージ力が近い生徒同士をグルーピングすることで、学力差により生じる依存的な姿勢をなくし、主体的な学習者として授業に参加する状況を作る。
- ・事前に個人で考える時間を設定する。
- ・話し合いの前に各自で新聞記事を読み、段落ごとに要約を考え、ワークシートに記入する。

4 協同学習スキル

- ・ルールを設定した話し合いをし、それに向けた話の聞き方を身につける。
- ・事前に話し合いの際のルールの指導を受けて、自分の意見にはその理由を付けることや相手の考えを批判したり否定したりしないことなどを守って学習する。

- ・他者の意見の模倣や追従ではなく、自分のイメージを自分の言葉で考えて伝えることを意識して学習する。

5 チームの振り返り

- ・課題を全体で確認する。
- ・ワークシートを用いて自己評価する場面を継続的に設定する。
- ・自分の意見が全体の意見の中でどのように位置付けられるか、確認できる場面を設定する。

(3) 国語で協同学習を取り入れるメリット

- ・基礎教科としての言語力の視点から見ると、特に生徒個々の要約力や読解力の向上が図られる。
- ・就労につながる言語力の視点として見ると、要約及び発表において、生徒の実態に応じた言語力の向上が図られる。
- ・グループ内での話が円滑に進み、要約文や言葉の発見など、様々なかたちの成果を作り出すことができた。相互に生徒同士が自分の考えを交流する場面が見られる。
- ・グループ内での意見交流の後には、多くの生徒が自分の意見を修正したものの、修正しなかった生徒もいた。意見を変える立場や変えない立場の双方について、「生徒の選択」を尊重できる。
- ・生徒一人一人の意見は、付箋を利用し、集団全体で確認する場を設定するなど、各グループの考えの再確認と全体での情報共有を図ることができる。
- ・情報共有の場面を通して各自のコミュニケーション力の向上が見られ、みんなで一つの物を完成させようと主体的に学習することができるようになる。また、生徒個々のコミュニケーション力の向上が見られ、「みんなで一つの課題の解決に向けて取り組もう。」と主体的に学習することができる。
- ・生徒の実態に応じた教材、活動内容を用意することで、全員が自分の力で読解力や要約に取り組んだり、詩の内容に沿った心情的な言葉やイメージを基に「自分の考え」を持った上で話し合いに臨んだりすることができる。

(4) 課題点

意見が対立したとき、生徒は冷静さを欠いて事前に確認したルールが守られないことがあり、途中で教師の介入が必要となる場合があった。また、要約や発表に向けた話し合いの時間が長くなったとき、簡単な振り返りにとどまり、次回に生かすポイントまで共有しきれないこともあった。さらに、正解につながる言葉やイメージが予想以上に多く出た場合、生徒自身が全体の意見を見渡しきれなくなる恐れも考えられる。ただしこれは、国語特有の「正解が多岐に渡る。」という性質上、やむを得ず生ずる課題でもある。

実践レポート

単元・題材名 (授業名)	金銭の計算 (第4回)	生 徒	1学年生徒8名
		場 所	農業科1年教室
日 時	平成29年11月29日(水)2校時	指 導 者	T1:西脇 T2:村瀬

① 互恵的な相互依存関係

金銭の学習において、概数を用いた計算や計算機を活用した。また、現在の生活に関わる教材を活用するようにし、将来の社会生活に生かせる内容設定を行うようにした。

各グループ内で話し合いを行い、予算内で買い物計画を立てることを目標にして、協力して計画を作り上げることで協同学習の互恵的な相互依存関係の要素を満たすことができると考える。

チラシから野菜を選択する場面では積極的な話し合いが持たれ、目的意識を持って取り組むことができていた。また、計算ではお互いに助け合いの場面が見られた。

② 対面的なやりとり

二人一組のグループ分けの話し合いやチラシの中から食材を選ばせた。食材の概算計算を行う際にグループ内で話し合いを中心に学習を進めることで対面的なやりとりの場を設定した。やりとりの中では意見を出し合ってまとめたり、計算間違いを教えるなど議論したり助け合う場面を設定した。

生徒の欠席の関係で話し合いがスムーズに行われるようにグループ分けは教師が行った。計算の仕方を教える場面があるなど、積極的なコミュニケーションが図られていた。

③ 個人としての責任

各グループ内では食材選び、概算計算、どのような買い物の計画になったのか発表する役割を話し合いで決めるように促した。食材選びでは正しい答えがあるわけではなく、各々の考え方を伝えることを意図して行った。概算の計算では単元で繰り返し行った計算の仕方を確認させた。買い物計画の発表では活動のまとめを分かりやすく伝えることを意図して行った。

話し合いが積極的に行われていたが、話が盛り上がりすぎて一人一人の個人の責任については意識付けがあまり図られていなかった。今後、一人一人の役割については、役割分担するときに名前をプリントに記入させ、意識付けを図る。

④ 協同学習スキル

本時の学習は買い物という日常生活と関連深い内容での学習である。また、チラシの中から必要な商品を選んだり、計算機を使用して答えを確かめるなど協同学習スキルの考えるスキルの要素が含まれる。また、グループでの話し合いを通して相手に聞いたり、説明したり、考えをまとめるなどコミュニケーションスキルを高める活動を行った。

意見を伝えることや考えをまとめる活動の中で、積極的な話し合いに参加できていない生徒には意見を整理して伝える支援をすることで、全体としての話し合いがまとまる様子が見られた。

⑤ チームの振り返り

振り返りシートで自己反省し、話し合いや進め方がどうだったのかを評価をさせることで自分の課題などの理解を深めさせる。また、教師が良い点を伝えることで学習のフィードバックを行い、課題改善に向けて具体的な取り組みを理解させる。

話し合いに積極的に取り組めたことやお互いに助け合いができたという良かった点、時間を意識せずに活動していたことなどの悪かった点を各々振り返ることができていた。

1 学年 数学 学習指導案

単元・題材名 (授業名)	金銭の計算 (第 4 回)	生 徒	1 年生徒 8 名
		場 所	農業科 1 年教室
日 時	平成 29 年 12 月 18 日 (月) 6 校時	指 導 者	T1: 西脇 T2: 村瀬

1 授業のねらい

(単元の目標)

- ・金銭の計算を筆算で正確に行うことができる。
- ・消費税を含んだ簡単な計算を行うことができる。
- ・数を四捨五入、切り上げや切り捨てして概数に表すことができる。
- ・概数を使った金銭の計算ができ、予算内で買い物の計画を立てることができる。

(本時の目標)

- ・概数を用いておおよその合計金額を計算し、予算内で買い物の計画を立てることができる。
- ・仲間と協力しながら買い物の計画を立てることができる。

2 生徒について

- ・基本的な四則計算は解くことができるが、計算ミスすることがある生徒が多い。
- ・指示されたことをすぐに理解し、取り組むことができるが集中力が持続できない。
- ・コミュニケーション力は高く、積極的に仲間と関わることができる。

3 指導計画

- 第 1 回 1 2 月 4 日 : 消費税を含んだ文章問題
 第 2 回 1 2 月 6 日 : 概数計算 (四捨五入、切り上げ、切り下げ)
 第 3 回 1 2 月 1 1 日 : 概数を用いておおよその合計金額の計算
 第 4 回 1 2 月 1 8 日 : 予算内で買い物計画を立てる (本時)

4 本時の展開

	学習活動	生徒の活動	教師の活動	教材教具
導入 10 分	・挨拶 ・前時の復習 ・本時の学習内容について	・号令に合わせて挨拶する。 ・消費税の計算、概数計算の取り組みを振り返る。 ・本時の説明を聞き、学習の流れを知り、本時の目標を理解する。 ・話し合いをして 4 人 1 組のグループをつくる。	・日直に号令をかけさせる。 ・前時の復習を口頭で確認する。 ・本時の学習の流れを黒板で確認する。 <協同学習の要素や配慮事項> ・学習内容、流れを黒板に提示する (配慮⑬) ・友達と話し合いながら、協力して買い物計画をする課題を設定する (①) ・話し合いで 4 人 1 組のグループをつくる (②) ・チラシ、学習プリントを配る。	学習の流れ 確認用紙

展開 30分	・役割決め ・食材選び ・概数計算 ・計算器確認 ・発表	・役割分担を決める ①チラシから食材を選ぶ役割。 ②概数計算をする役割。 ③計算器で確認する役割。 ③買い物計画を発表する役割。 ・チラシから食材を選ぶ。 ・概数計算をする。 ・計算器で税込み価格を確認する。 ・発表内容をまとめる。 ・発表する。	・役割分担について説明する。決まったら教師に伝えるように伝える。 <協同学習の要素や配慮事項> ・買い物を計画するための役割を話し合いで選び、それぞれの役割に責任を持つ（③） ・食材を選ぶ際には、自分の意見だけではなく、周りの意見も尊重しながら決めるよう説明する。（配慮⑤） ・チラシから食材を選ぶ際には、担当者中心で話し合いながら決めるように促す。 ・概数計算をする際は担当者が計算し、分からなければ聞くように言葉がけする。 ④協同学習スキル ・チラシを見て税込価格、本体価格の違いについて説明する（④） ・チラシの税込価格を見て、安い価格の商品を選択するよう促す。（④） ・トッピングを一品選ぶ際は、お互いの意見を尊重するように促す。（④） ・概数計算で分からない時は仲間に聞くように促す。（④） ・計算器で税込価格を計算させ、予算内で買い物ができるのか確認させる。（④） ・積極的な発言のない生徒にも意見を聞きながら話し合いをするように伝える（配慮④） ・グループで確認しながら発表できるように言葉がけする。 ・まとめを発表させる。 <協同学習の要素や配慮事項> ・買い物計画を発表する際にはどのような話し合いでトッピングを選んだのか理由を説明させる。④	チラシ 計算機 買い物計画 ワークシート
-------------------	---	---	---	---

整理 10分	・振り返り	・振り返りシートを記入し、本時の学習の自己評価をする。 ・振り返りシートをもとに活動について感想を述べる。 ・教師の講評を聞き、次回に向けての改善点を理解する。 ・日直に合わせてあいさつする。	・振り返りシートを発表させる。 ・本日の活動についてよかった点、課題を伝える。 <協同学習の要素や配慮事項> ⑤チームの振り返り ・振り返りシートを使い、話し合いを評価する。また、教師が目標を踏まえて良かった点悪かった点を伝える(⑤) ・日直に号令をかけさせる。	振り返りシート
-----------	---	---	---	---------

5 指導上の工夫

① 互恵的な相互依存関係

グループで話し合いをしながら協力して買い物計画を立てるという共通の目標を持たせることで、協力する姿勢や意識を養う。

② 対面的なやりとり

それぞれの役割の課題を低く設定することでお互いに意見が言いやすい状況をつくる。また、話し合いの様子を観察し、消極的な生徒には考えを引き出す言葉がけを行い、話し合いに参加できるようにする。

③ 個人としての責任

各グループ内での食材選びや概算計算、計算機での確認や買い物計画の発表の役割を話し合いで決めさせる。一人の意見ではなく全員が意見を述べることにできるように必要に応じて助言する。

④ 協同学習スキル

チラシの中から必要な商品を選んだり、計算機を使用して答えを確かめさせる。また、グループでの話し合いを通して相手に聞いたり、説明したり、考えをまとめるなどコミュニケーションスキルを高める活動を行う。

⑤ チームの振り返り

話し合いの振り返りをプリントに記入する。振り返りがしやすいように簡素な質問形式で行う。また、目標を踏まえてよかった点、悪かった点を講評し、次の学習や話し合いに生かすことができるように助言する。

6 指導の効果

生徒にとって興味のある買い物の題材を扱うことで、チラシを見て商品を選ぶ際に、複数の人がいる中では普段積極的に会話をしない生徒が意見を述べるなど意欲的に活動に取り組む様子が見られた。

本学習グループにも数学の計算を苦手としている生徒がいるが、協同学習として教え合いなどの活動を意図的に盛り込むことで苦手なことにも意欲的に取り組む様子が見られた。

また、個人としての役割を4つ設けたが、それぞれの役割を果たし、協力して取り組む様子が

見られた。

振り返りでは話し合いで、周りの意見を聞くことが必要だったと課題についても考えることができていた。

7 今後の課題

話し合いでは中心になる生徒がリードをすることでグループとしての目標である買い物計画を立てて発表することができたが、話し合いが一部の生徒のみに偏って決められてしまう様子が見られた。改善点としては話し合いを充実させるために、グループ分けは生徒の実態に応じて教師で行い、一部の生徒だけでなく全員で責任を持って個々の役割を意識した話し合いができるようにすることが必要だと感じた。

また、終始話し合いの場面が多く、数学的な要素をどのように織り込むのかが今後の課題である。

※ 授業を振り返って

授業を終えて、数学の授業の中で役割を与え、お互いのコミュニケーションを意識した授業展開の難しさを感じた。題材の流れでまとめとして買い物計画を考えたと、数学的要素をもっと取り入れた学習内容にしても良かった。

今回の学習の中では一人一人の役割についての課題を低く設定することで積極的に話し合いがなされたことがよかった。しかし、4人のグループ構成では話し合う人が偏る様子も見られ、グループ分けの大切さや話し合いにおける教師の支援の在り方について改善が必要であると知ることができた。

実践レポート

単元・題材名 (授業名)	金銭の計算 (第 4 回)	生 徒	1 学年生徒 8 名
		場 所	農業科 1 年教室
日 時	平成 29 年 12 月 20 日 (水) 2 校時	指 導 者	T1: 西脇 T2: 村瀬

① 互恵的な相互依存関係

提示されたチラシを基に各ペアで話し合いを行い、予算内で買い物計画を立てる場面を設定した。黒板に表を作り、話し合いを基に計画した商品や値段を記入させて、各ペアの買い物計画を明確にすることでお互いに協力するという関係を作った。

② 対面的なやりとり

2 人のペアでの話し合いでチラシの中から食材を選ぶ場面を設定した。お互いが意見の主張をするだけでなく、相手の意見を聞きながらグループの計画を立てるように伝えた。チラシの値段を見比べながら、価格の安いものなどを見つけ、お互いに意見を発言しながら食材を選ぶことができた。また、学習グループを前回の 4 人から 2 人のペアにすることで、一人一人の意見が反映され、目的意識や協力する姿勢を引き出すことができた。

③ 個人としての責任

ペアで食材選び、筆算での税込み価格の計算、買い物計画の発表の役割を話し合いで決める場面を設定した。計算では間違えないように正確に計算することと、再度確認の計算をするように伝え、個人としての役割を意識させた。また、発表では他のグループに分かりやすく伝えることと、食材を選ぶ際の話し合いの経緯についても伝えるように促すことで、お互いの買い物計画がどのような話し合いで進んだのか伝え合うことができた。

④ 協同学習スキル

ペアでの話し合いを通して相手に聞いたり、説明したり、考えをまとめる場面を設定した。チラシの中から必要な商品を選んだり、自分の考えをまとめて、わかりやすく相手に伝える工夫をすることや相手の意見を尊重するコミュニケーションの取り方の必要性を伝え、話し合いを行った。話し合いの中では自己主張が強く、相手の意見を聞き入れることができていない様子も見られ、意見を聞く姿勢や話し合いについて具体的に伝えた。

⑤ チームの振り返り

振り返りシートを用いて、伝え方や聞き方についてできていたか自己評価をさせた。また、ペアとして協力できたこと、できなかったことを感想として述べさせることで学習を振り返ることができた。また、教師から「相手の話を聞くことに課題があった」ことを伝えると、改善すべきことについてお互いに意見を伝えることができた。

話し合いについては前回の学習より積極的に行われ、自分の考えを伝えることができていたが、意見を聞くことに新たに課題が見られた。

本学習においてはこれまでに学習した消費税の計算を筆算で計算したり、計算機で確認する学習を取り入れた。主に話し合いや教え合いのコミュニケーションに関わる要素が多く協同学習としての取り組みは一定の効果があったと思われるが、数学的な要素を取り入れた学習としては工夫が必要であった。

実践レポート

単元・題材名 (授業名)	旅行の予定を立てる(暦) (暦の学習 第2回)	生徒	2 学年習熟度クラス③7名 (内 1 名欠席)
		場所	美術室
日時	平成29年12月4日(月)4校時	指導者	T1:森山

① 互恵的な相互依存関係

「暦」の単元と関連付けて暦に関する言葉の意味(半年、何日間、何日後、何泊何日、第〇何曜日など)を考えながら、行き先の商業施設やイベントの定休日や開店時間を意識してグループで旅行の計画を立てるという場面を設定した。計画表に行き先と到着時刻を書き込んで予定立てることにより全員で協力し合うことができた。しかし、制限時間内に完成までは至らなかった。

② 対面的なやりとり

資料を基に自分の行きたい場所を考え仲間に伝え合う、または司会者と伝え合ってまとめる場面を設定したことにより、対面的なやりとりを行うことができた。しかし、グループの仲間全員ではなく司会者のみに行きたい場所を伝えたり、資料だけを司会者に提示したりして伝える様子が生徒によっては見られた。そのため次回は資料だけを提示するのではなく、司会者や仲間全員に自分の意見を伝えるよう生徒に促す。

③ 個人としての責任

個人としての責任として1人1箇所必ず行きたい場所を決めることにより、グループメンバー全員の意見を伝え合うきっかけを作ることができ、全員が話し合いに参加することができた。しかし、話し合いそのものの役割分担を明確に指導者が提示をしていなかったため、話し合いがスムーズに行われず時間内に計画表の完成まで至らなかった。話し合いそのものの役割分担を指導者から提示する必要性が分かった。そのため、次回は話し合いそのものの役割分担を決める時間を設ける。

④ 協同学習スキル

仲間の意見を馬鹿にした態度をしない、もしくは説明をする際は優しい言葉遣いをする(コミュニケーションスキル③)という決まりを設定したことにより、以前は話し合いの場面では厳しい言葉遣いになりがちであったが、そのような様子が見られず、厳しい言葉遣いにならないようになりかなり気を遣って話し合いを進めていた。また、自分も同じ意見であるときに称賛した言葉を遣うことができていた生徒がいた。

多数ある資料から定休日や開店時間を重視して、行き先を選択する場面(考えるスキル⑮)を設定した。生徒の「気付き」を重視してあえて指導者から、定休日や開店時間を重視するように直接的に伝えなかったが、間接的に伝えたことにより意識することができた生徒がいた。気付くことができなかった生徒に関しては授業の終盤に意識するようまとめの説明を行った。

⑤ チームの振り返り

自分達の話し合いで気をつけたこと、もっとこう話し合えば良かったところを振り返りを行う予定であったが、時間がなかったため指導者の方から良かったところを伝えた。次回では授業時間設定の見直しを行い、確実に振り返りを生徒間で行うことができるようにしたい。

2 学年 数学科 学習指導案

単元・題材名 (授業名)	「旅行の予定を決めよう」(数学)	生 徒	2 学年習熟度別グループ3(7名)
		場 所	美術室
日 時	平成29年12月18日(月)4校時	指 導 者	T1:森山

1 授業のねらい

(単元の目標)

- ・ 指定された日数を数えることができる。
- ・ 暦に関する言葉の意味を理解することができる。

(本時の目標)

- ・ 定休日、開店時間を意識して行き先を決めることができる。
- ・ 暦に関する言葉の意味を考え、指定された日数を数えることができる。

2 生徒について

- ・ 日数を数えたり、暦に関する言葉の意味を難なく答えたりすることができる生徒と難しい生徒がいる。
- ・ 生徒全体的に司会者として自分で考えて進行するのが難しく、教師の助言が必要である。
- ・ 時間指定をして話し合いをする際、教員から助言がないと時間を意識することが難しい。
- ・ 話し合いに関心が無くなると、集中して参加することが難しくなる生徒がいる。

3 指導計画

第1回 12月 1日 : 暦の意味、何日・何ヶ月・何年後の数え方

第2回 12月 4日 : 旅行の予定を決めよう①

第3回 12月 8日 : 第○何曜日はいつ?

第4回 12月11日 : 旅行の予定を決めよう②(本時)

第5回 1月19日 : 旅行の予定を決めよう③

4 本時の展開

	学習活動	生徒の活動	教師の活動	教材教具
導入 5分	・ 出席確認 ・ 挨拶 ・ 本時の学習について ・ 本時の目標について	・ 指定された場所に着席する。 ・ 日直が号令をかける。 ・ 本時の学習内容を知る。 ・ 本時の目標を知る。	・ 全生徒が着席したか確認する。 <協同学習の要素や配慮事項> ・ 座席の配置を話しやすいように向かい合わせる(配慮⑦) ・ 日直の生徒に号令を依頼する。 ・ 本時の学習内容について説明する。 ・ 本時の目標について説明する。 <協同学習の要素や配慮事項> ・ 本時の流れ、目標を黒板に掲示する(配慮⑮)	黒板

展開 40分	- 話し合うための役割分担を話し合う。 - 資料をもとに行き先を選択して予定表を完成させる。 - 予定表の確認（答え合わせ）	- 司会、タイムキーパー、記録を各1名決める。 - 資料をもとに行き先を選択する。 - 予定表が完成したら教師に報告する - 予定表に書かれている行き先は開店しているのか確認をする。	- 司会、タイムキーパー、記録を各1名決めるよう指示する。 <協同学習の要素や配慮事項> 7名グループを作り、一人一人話し合いに参加するために役割を当てる。(③) - 資料をもとに行き先を選択するために決まりを説明する。 - 話し合いに行き詰まっている様子が見られれば教師から司会を進行の仕方を適宜助言する。 <協同学習の要素や配慮事項> - グループで協力し合って旅行の行き先の予定を立てる。(①) - 自分の考えを仲間に伝え合う、または司会者と伝え合ってまとめる。(②) - 話し合いで仲間の意見を馬鹿にしない、また優しい言葉遣いで話し合う。(④) - 多数ある資料から定休日や開店時間を意識して正しい情報を選択させる。(④) - 予定表が完成したら報告を受ける。 <協同学習の要素や配慮事項> - メンバー全員が達成感を感じることができるように言葉がけを工夫する。(配慮④) - 予定表に書かれている行き先は開店しているのか資料を見ながら確認を生徒と一緒にやる。	ホワイトボード、資料、ワークシート
整理 10分	- 振り返り - 挨拶	- グループでの話し合いの協力の仕方の良かった点、改善すべき点をワークシートを使用し振り返る。 - 日直が号令を行う	- 話し合いの協力の仕方について教師から良かった点、改善すべき点を伝える。 <協同学習の要素や配慮事項> - 話し合いの協力の仕方の良かった点、改善すべき点を振り返り情報をグループで共有する。(⑤) - 日直の生徒に号令を依頼する。	

5 指導上の工夫

① 互恵的な相互依存関係

「暦」の単元と関連付けて暦に関する言葉の意味（半年、何日間、何日後、何泊何日、第○何曜日など）を考えながら、行き先の定休日や開店時間を意識してグループで旅行の計画を立てる。また、計画表に行き先と到着時刻を書き込んで、協力して予定立てることにより全員で目標を達成させる場面を設定した。

② 対面的なやりとり

資料を基に自分の行きたい場所を考え仲間に伝え合う、または司会者と伝え合って予定表にまとめる場面を設定した。グループの仲間全員ではなく司会者のみに行きたい場所を伝えたり、資料だけを司会者に提示したりして伝える様子が生徒によっては見られるため、資料だけを提示するのではなく、司会者や仲間全員に自分の意見を伝えるよう教師が適切な言葉がけを行う。

③ 個人としての責任

個人としての責任としてみんなが考えている要素を一つ以上盛り込み、1人1箇所必ず行きたい場所を決めることによりグループメンバー全員の意見を伝え合うきっかけづくりと、全員が話し合いに参加する場面を設定した。話し合いそのものの役割分担を指導者から提示する必要があるため、話し合いそのものの役割分担を決める時間を設定する。

④ 協同学習スキル

仲間の意見を馬鹿にした態度をしない、もしくは説明をする際は優しい言葉遣いをする（コミュニケーションスキル③）という決まりを設定した。生徒の話し合いから適宜教師が適切な言葉がけを行う。

多数ある資料から定休日や開店時間を重視して、行き先を選択する場面（考えるスキル⑮）を設定した。

⑤ チームの振り返り

グループでの話し合いの協力の仕方の良かった点、改善すべき点をワークシートを使用して振り返る。また良かった点、改善すべき点をまとめグループのメンバー全員で情報を共有する。

6 指導の効果

多数ある資料の中には旅行の日程とは合わない資料もあり、数名の生徒がそれに気付かず選んでしまっていた。しかし、一度教師が言葉がけをしたことにより、選んでしまっていた生徒に適切な資料ではなく、日程を重視するように他の生徒が指摘することができている場面が見られた。予定表をまとめるために質問し合ったり、お互いの行動を見ていたりすることができていた。また、行き先の開店・開催日を重視する意識付けを行うことができた。

学習の目標を黒板に書くことにより、学習内容をイメージして学習に取り組むことができた。また、話し合いをするための決まり（仲間の意見を馬鹿にしない、優しい言葉を遣う、意見を言うときは仲間全員に伝える、意見を言っている人のほうを向いて話を聞く）を黒板に視覚的に掲示したことにより、常に実践することができていた。

1人1箇所必ず行きたい場所を決めることによりグループメンバー全員の意見を伝え合うきっかけとなり、全員が話し合いに参加することができ、全員が考えている要素を一つ以上盛り込むことができた。

7 今後の課題

司会、タイムキーパー、記録と話し合いを円滑に進めるために役割分担を行ったが、実態によってはそれぞれの役割を果たすための技能が身につけておらず、自分の意見を考えることに精一

杯になってしまい話し合いを円滑に進めることが難しい場面が見られた。司会者に他生徒が司会進行のために助言をしたり、教師が用意した司会者の進行を助けるお助けシートを用意したりしたが難しかった様子が見られた。もし、司会、タイムキーパー、記録を役割として設定する場合はそれらの技能を伸ばすための学習を設定する、もしくは実態に合わせて教師が役割分担をする必要がある。また、役割が当たっていない生徒がそれらの役割があたっている生徒に助言をして助け合うための場面を設定する必要がある。

※ 授業を振り返って

授業の後半では授業終了までの時間に追われてしまい、最後の話し合いの振り返りでは個人で振り返ることができたが、全体で話し合って振り返ることができなかった。授業時間の配分や学習量を生徒の実態に合わせてもっと調整する必要があった。

『7 今後の課題』でも述べたが、司会、タイムキーパー、記録が自分の意見を考えるのに精一杯になってしまい役割をそれぞれ果たすのが難しかった。それらの技能が身につけていない生徒に役割が当たった際は教師の援助をどこまでしてよいものか難しさを感じた。

話し合いを行うための態度や技能、司会などの技能を身につけたりする協同学習を行うための土台作りをまずは行う必要があると感じた。

実践レポート

単元・題材名 (授業名)	旅行の予定を立てる (暦の学習 第5回)	生 徒	2 学年習熟度クラス③7名
		場 所	美術室
日 時	平成30年1月19日(金)2校時	指 導 者	T1:森山

① 互恵的な相互依存関係

「暦」の単元と関連付けて暦に関する言葉の意味(半年、何日間、何日後、何泊何日、第〇何曜日など)を考えながら、旅行へ行く指定された日程を基に行き先の商業施設やイベントの定休日や開催期間を意識してグループで旅行の計画を立てるという場面を設定した。計画表に行き先と到着時刻を書き込んで、協力して予定を立てることにより全員で協力し合うことができた。

② 対面的なやりとり

資料を基に、自分の行きたい場所を定休日や開催期間を確認し合いながら仲間に伝え合う場面を設定したことにより、対面的なやりとりを行うことができた。行き先の定休日や開催期間を確認し合いながら意見交換を行う場面が生徒によっては積極的に見られた。

③ 個人としての責任

個人としての責任は1人1箇所必ず行きたい場所を決めることにより、グループメンバー全員の意見を伝え合うきっかけを作ることができ、全員が話し合いに参加し、個人としての責任を果たすことができた。前時では司会、記録、タイムキーパーの役割を設定したが、実態によってはそれぞれの役割を果たすための技能が身に付いておらず、自分の意見を考えることに精一杯になってしまい、話し合いを円滑に進めることが難しい場面が見られた。そのため本時では教師がその役割を担ったことにより、生徒が自分の意見を考えることに専念することができた。

④ 協同学習スキル

仲間の意見を馬鹿にした態度をしない、もしくは説明をする際は優しい言葉遣いをする(コミュニケーションスキル③)という決まりを設定したことにより、適切な言葉遣いでコミュニケーションすることができた。また、自分も同じ意見であるときに称賛した言葉を遣うことができた生徒もいた。

旅行へ行く日程を基に多数ある資料から定休日や開催期間を重視して、行き先を選択する場面(考えるスキル⑤)を設定した。行き先に開催していないイベントを選んだ生徒に日程を重視することができている生徒が助言をしている様子が見られた。また、話し合いのグループメンバー全員が仲間の意見や話に関心を持って聞いている様子が見られた。

⑤ チームの振り返り

自分達の話し合いで気を付けたこと、もっとこのように話し合えば良かったところについて、アンケートを活用して振り返りを行い情報の共有を行った。暦の話し合いの学習は本時で3回目になる。1回目と2回目では生徒が座る位置を指定して厳粛な雰囲気で行っていたが、本時では席の位置は特に指定せずに生徒の主体性を重視して話し合いを行った。その結果、アンケートの自由記述の中で「楽しく話し合いを行うことができて良かった。」と記述があり、数学に対する学習意欲の向上につながるのではないかと感じた。また、前時に行った授業の中でのチームの振り返りで教師が助言したことを生かすことができ、良い話し合いを行うことができた。

実践レポート

単元・題材名 (授業名)	「協力して数える」(第1回)	生 徒	生活家庭科3年生徒6名
		場 所	生活家庭科3年教室
日 時	平成29年6月27日(火)4校時	指 導 者	T1:初山 T2:岩城 T3:石川

① 互恵的な相互依存関係

与えられた物の数を全員が協力して数えることで総数がわかるという場面を設定した。黒板に表を作り、それぞれが数えた数を書き込んでいった。自分が数えた数を記入して表が完成したことで、全員で協力し合うという関係をつくることができた。

② 対面的なやりとり

与えられた物の数を数えたら終わりではなく、それをペアやグループの人に伝えるという場面を設定した。グループの全員が数えた結果を言えるようにと指示したことで、「〇個でした。」などと結果を伝え合って確認するやりとりが見られた。しかし、数種類のものを数えるときに、誰が何を担当するのかを伝えきれない生徒も見られた。

③ 個人としての責任

最初の段階では個人で数えさせて表を完成させたことで、自分の数えた結果が重要であることを理解させることができた。自分の数えた数が間違っていた場合は総数間違いになるので、丁寧に数え、間違いがないように見直すようにさせたが、数え間違いがあったので個別の支援がもっと必要であった。また数種類のものを数える際に、グループの中で生徒が役割分担をしたことで個人の責任を果たすことができていた。

④ 協同学習スキル

人と協力して数えるときに、どのように数えていくのかを確認することの必要性を伝え、その確認の仕方について具体例を出して教えた。また数えた結果を伝える際にも相手にわかりやすく伝える必要性があることを教えた。

個人で数え、ペアで数え、グループ(3人)で数え、と段階的に人数を増やしていったことで、ペアのときには1人の相手とのやりとりをする、グループのときには自分以外の2人に言葉がけをするなど、やりとりの仕方に変化が見られた。

⑤ チームの振り返り

協力の仕方では良かった点、良くなかった点を挙げさせ、②③④ができていたのかの振り返りを行う予定であったが、時間がなかったためそれぞれのグループについていた教師から良かった点を挙げた。次回はどのような点の振り返りをさせるかを絞ってチームの振り返りを行わせたい。

3 学年 数学科 学習指導案

単元・題材名 (授業名)	「協力して数える」(第2回)	生 徒	生活家庭科3年生徒5名
		場 所	生活家庭科3年教室
日 時	平成29年7月4日(火)4校時	指 導 者	T1:初山 T2:岩城 T3:石川

1 授業のねらい

(単元の目標)

- ・同じものの同士の集合づくりができる。
- ・物の集まりや数詞と対応して、個数を数えることができる。

(本時の目標)

- ・具体物の数を数えることができる。
- ・仲間と協力して数えるときに必要なやりとりを知り、実践することができる。

2 生徒について

- ・個数を数え間違えることはあるが、同じものの同士の集合づくりをすることができる。
- ・数詞と対応して個数を数えることはできるが、数が大きくなってくると理解があいまいな生徒がいる。
- ・生徒同士の話し合いで役割の分担などを決めることができるが、自分から意見を言うことが難しい生徒もいる。

3 指導計画

第1回 6月27日 : 具体物を数えることの実践、協力に必要なやりとりについての説明

第2回 7月 4日 : 具体物を協力して数えることの実践(本時)

第3回 7月18日 : 前時の振り返りから、改善点を加えて協力して数えることを実践

4 本時の展開

	学習活動	生徒の活動	教師の活動	教材教具
導入 10 分	・挨拶 ・50マス計算 ・本時の学習について	・日直が号令を行う。 ・50マス計算を行う。 ・丸付けをする。 ・本時の学習内容を知る。 ・数えるときに気を付けることや必要なやりとりについて知る。	・時間を計測する。 ・答えを発表する。 ・本時の学習内容を伝える。 <協同学習の要素や配慮事項> ・黒板に表を書き、活動の流れを視覚的に示す。(配慮⑫) ・数えるときに気を付けることについて説明する。 ・協力して数えるために必要なやりとりについて説明する。 <協同学習の要素や配慮事項> ・全員に「数える」という役割を与える。(③)	・タイマー

展開 30分	・ 具体物の数を数える	・ ペアで数え、発表する。 ・ グループ（3人）で数える。 ・ グループでの良かった点、良くなかった点を振り返る。 ・ 全員（5人）で数える。	・ 数え棒を配布する。 ・ 表に数を書き込み、答え合わせをする。 ・ 牛乳パックを配布する。 ・ 表に数を書き込み、答え合わせをする。 <協同学習の要素や配慮事項> ・ 与えられた物の数を、ペアやグループで分担して数える（①） ・ 数え方や数えた結果を仲間に教え合う。（②） ・ 協力して数えやすいように机の位置を移動させる。（配慮⑦） ・ ペアやグループで生徒のやりとりが成立するように教師は具体例を挙げて言葉掛けをするなどの支援を行う。（④） ・ ペアやグループの中でお互いに見直しをさせる。（配慮②） ・ 具体物の個数の答えをホワイトボードに掲示する。（配慮⑬） ・ 数え間違いなく表の欄を埋められた際には、協力して表を完成できたことを称賛する。（配慮⑪） ・ 生徒の発言から、改善点をまとめる。 <協同学習の要素や配慮事項> ・ ここまでのグループの取り組み方を振り返る。（⑤） ・ ポットを配布する。 <協同学習の要素や配慮事項> ・ 段階的に人数や数える物の個数を増やしていく。（配慮①） ・ 表に数を書き込み、答え合わせをする。	・ 数え棒 ・ ホワイトボード ・ 牛乳パック ・ ポット（ビニール鉢）
整理 5分	・ 振り返り ・ 挨拶	・ 本時の授業を振り返る。 ・ 日直が号令を行う。	・ 生徒の理解度を確認する。 <協同学習の要素や配慮事項> ・ 改善点をまとめた後の、数え方や生徒同士のやりとりの仕方で良かった点を教師から伝える。（⑤、配慮⑩）	

5 指導上の工夫

① 互恵的な相互依存関係

与えられた物の数を全員が協力して数えることで総数が分かるという場面を設定した。黒板に表を作り、自分達が数えた数字が記入されて、その総数が明確になることで完成する表を用いることで、全員で協力し合うという関係を作ることをねらいとした。

② 対面的なやりとり

与えられた物の数を数えたら終わりではなく、それをペアやグループの中で伝え合ったり教え合ったりするという場面を設定した。また設定時間内に数え終わった際には、見直しをペアやグループで行うように伝えた。やりとりの仕方にとまどう生徒には、教師が適切な言葉かけを行う。

③ 個人としての責任

自分の数えた数が間違っていた場合は総数も間違いになるので、丁寧に数え、間違いがないように見直すようにさせることで個人の責任をもたせる。また、数種類のもの（3色の数え棒）を用意して、生徒同士の話し合いで色ごとに役割分担できるように促す。

④ 協同学習スキル

人と協力して数えるときに、どのように（いくつずつのまとまりをつくるか、数えたものをどのように置くかなど）数えていくのかを確認することの必要性を伝えるとともにモデルを示す。前時に確認の仕方について具体例（10ずつまとめて、並べて置くなど）を出して教えている。また、数えた結果を伝える際にも相手に分かりやすく伝える必要性があることを伝え、生徒同士がどのように伝え合っているか注視し、必要があれば教師が言葉をかけて支援する。

⑤ チームの振り返り

グループでの協力の仕方でも良かった点、良くなかった点を挙げさせる時間を設ける。またその意見を聞いて改善点をまとめる。

6 指導の効果

見やすい表を書き、数える物の欄に①～③と番号を付けたことで、何種類の活動するのか視覚的に見通しを持たせることができた。数えるときに気をつける点を繰り返し伝えてきたことで、生徒が自ら「10ずつのまとまりを作って数える」と言うことができ、本時の目標である「具体物の数を数えることができる」を全員達成することができた。

協力するときに気をつける点（数え方を話し合う。見直しをし合う。結果を伝え合う）も箇条書きに板書して、ポイントをわかりやすく提示したことで、話し合いのときや数えた後に実践できていた。

数える物を、数え棒、牛乳パック、ポットと毎回種類を変えたり、人数を、ペア、3人、5人と段階的に増やしたりしたことで、徐々に活動に慣れさせることができ、混乱することなく正確に数を数えることができた。

7 今後の課題

何のために協力するのか、協力して数えるメリットは何なのか、という動機付けが不足していた。一人で数える場合と複数で数える場合の比較をするなどして、協力する必要性をもっと伝えられると良かった。

話し合う、伝え合うなど協力するときの工夫を挙げたが、数えることはできても自分からは役割が見つけられない生徒がいた。またペアや3人グループでは協力することができたが、5人になると、発言が苦手な生徒が指示待ちになることがあった。「一人1回は発言する。」「話し合いの進行役を決める。」など状況に応じて条件を付けたり、教師が適切な助言をしたりなどの指導の工

夫が必要である。

数え方や協力の仕方について生徒に考えさせる時間が不足し、どのような点が良かったのか、改善点は何かなど振り返りも不十分であった。数えた後で生徒同士の振り返りの時間をとったり、教師が評価する時間をとったりして、数えた結果が正しいということだけではなく、そこに至る過程も重要だと伝える必要がある。

※ 授業を振り返って

板書は計画的に行うことができた。黒板の表に数字を記入して完成させていくことで、全員で協力し合うという関係を作ることをねらいとした。導入において学習のねらいをしっかり提示することで互恵的な相互依存関係を意識づけることが協同学習のカギであることがわかった。

ペアやグループでのやりとりは見られたが、数える制限時間を設定したことで、時間に追われてしまう場面も見られた。「本時の展開」ではグループの振り返りをさせるために展開の時間配分に注意をする必要がある。

前時から引き続き、「数える」という活動をしたことで、単元の目標である「同じものの同士の集合づくりができる。」、「物の集まりや数詞と対応して、個数を数えることができる。」 ことについて、手際良くできるようになってきたので、繰り返し行うことで定着を図りたい。

実践レポート

単元・題材名 (授業名)	「協力して数える」(第3回)	生 徒	生活家庭科3年生徒6名
		場 所	生活家庭科3年教室
日 時	平成29年7月18日(火)4校時	指 導 者	T1:初山 T2:岩城 T3:石川

① 互恵的な相互依存関係

与えられた物の数を全員が協力して数えることで総数が分かるという場面を設定した。黒板に表を作り、自分達が数えた数字が記入されて、その総数が明確になることで完成する表を用いることで、全員で協力し合うという関係を作ることができた。また、導入で何のために協力をするのかと生徒に発問したことで「一人で数えるより早い。」「協力することは(この授業以外での)他の場面でも役立つ。」などの意見が出て、協力することの必要性について理解を深めることができた。

② 対面的なやりとり

与えられた物の数を数えたら終わりではなく、それをペアやグループの中で伝え合ったり教え合ったりするという場面を設定した。また、設定時間内に数え終わった際には、見直しをペアやグループで行うように伝えた。やりとりの仕方にとまどう生徒には、教師が「数え終わった後はどうする?」と言葉がけしたことで見直しをし合うことができた。

③ 個人としての責任

自分の数えた数が間違っていた場合は総数も間違いになるので、丁寧に数え、間違いがないように見直すようにさせることで個人の責任を持たせた。また、数種類のもの(3種類の大きさのポット)を用意して、生徒同士の話し合いで大きさごとに役割分担できるように促した。

④ 協同学習スキル

人と協力して数えるときに、どのように(いくつずつのまとまりをつくるか、数えたものをどのように置くかなど)数えていくのかを確認することの必要性を伝えた。前時に確認の仕方について具体例(10ずつまとめて、並べて置くなど)を出して教えている。また、数えた結果を伝える際にも相手に分かりやすく伝える必要性があることを伝え、生徒同士がどのように伝え合っているか注視した。生徒同士で伝わりきっていない様子があれば、教師が伝えられた内容を分かっているのかを確認し、再度伝えるように言葉がけをした。

⑤ チームの振り返り

振り返りシートを作って、数え方や伝え方についてできていたか自己評価させた。またグループでの協力の仕方では良かった点、良くなかった点を挙げさせる時間を設けたことでどのような言葉のかけ方が良いのかを確認することができた。またその意見を聞いて教師からも「人任せにせずに責任を持って取り組む。」などの改善点を伝えた。今回の授業で学習した仲間との協力の仕方については数学の授業に限らず、あらゆる場面で生かせるように継続して指導していきたい。

まとめのレポート

教科・形態名	数学科	部会メンバー	西脇、初山、森山
--------	-----	--------	----------

（１）数学の指導内容や特性

数学科で取り扱う内容としては、「数と計算」、「量と測定」、「図形・数量関係」、「実務」から構成されている。特に「実務」においては、金銭、時刻、時間、暦など実生活に関連深い学習内容を取り上げている。

生徒の数量的な感覚を豊かにしたり、生活に役立つよう实际的に数量を処理したりする能力を高めたりするためには、生徒自らが興味関心をもち、数量を扱う必要性を感じ、目的意識をもって主体的に理解を深められるように、実生活に関連した具体的な指導内容を設定する必要がある。

日常生活に必要な数量や図形などに関する理解を深め、それらを実際の生活場面で取り扱い、生活に生かしていく能力と態度を育てることを目標としていることが特徴である。

（２）数学における協同学習の授業づくり

1 互恵的な相互依存関係

- ・与えられた物の数を、ペアやグループで協力し合って数える。
- ・営業日や定休日、時間などを意識してグループで協力し合って旅行の計画を立てる。
- ・グループで話し合って買い物の計画を立てる。

2 対面的なやりとり

- ・数え方や数えた結果を仲間に教え合う。
- ・旅行パンフレットの資料を基に自分の行きたい場所を考え、仲間や司会者に伝え合いながら予定表にまとめる。
- ・生徒の役割や課題を適切に設定することで、お互いに意見を伝え合う。

3 個人としての責任

- ・全員が「数える」という役割を担当する。
- ・全員の考えを取り入れるために、旅行の行き先について必ず行きたい場所を一人1箇所決める。
- ・購入商品の選択や概算計算、計算機での確認や買い物計画の発表の役割を果たす。

4 協同学習スキル

- ・「いくつずつのまとまりを作るか」、「数えた物をどのように置くか。」など、どのように協力して数えるのかを考える。
- ・数えた結果を相手に分かりやすく伝える。
- ・説明をする際は、仲間の意見を批判するような態度を取らず優しい言葉遣いをする。
- ・定休日や開店時間を意識して、多数ある旅行パンフレットの資料から行き先を選択する。
- ・チラシの中から必要な商品を選んだり、計算機を使用したりして予算内で購入できるように確かめる。
- ・グループでの話し合いを通して質問したり、説明したり、考えをまとめたりする。

5 チームの振り返り

- ・グループでの協力の方法が良かった点と改善すべき点にまとめ、グループのメンバー全員で情報を共有する。
- ・改善点をグループで共有した後、教師からも活動の良かった点を伝える。
- ・話し合いの振り返りがしやすいように、簡素な質問形式のプリントで振り返りを行う。
- ・目標を踏まえて良かった点や悪かった点を講評し、次の学習や話し合いに生かすことができるように助言する。

(3) 数学で協同学習を取り入れるメリット

- ・与えられた物の数を全員が協力して数えることで生徒に「一人で数えるより速い。」「協力することは（授業以外での）他の場面でも役立つ。」などと、協力することの必要性について理解を深めることができる。
- ・旅行の日程とは合わない旅行パンフレットの資料を選んでしまっていた仲間に、日程を意識するように指摘することができる。
- ・予定表をまとめるために、質問し合ったり、お互いの計画を確認し合ったりすることができる。
- ・チラシを見て商品を選ぶ際に、複数の人がいる中では普段積極的に会話をしない生徒が、意見を述べるなど意欲的に取り組むことができる。

(4) 課題点

協同学習を取り入れることにより、協力することの必要性について理解を深めることができたが、数量的な感覚や数量を処理する能力に差が見られたため、個別の支援が必要な場面があった。協同的な学習だけではなく、個別に学習を行う場面を設定したり、指導法を工夫したりする必要がある。

司会やタイムキーパー、記録の人たちで、話し合いを円滑に進めるために役割分担を行ったが、生徒の実態によってはそれぞれの役割を果たすための技能が身に付いておらず、自分の意見を考えることに精一杯になってしまい、話し合いを円滑に進めることが難しい場面が見られた。そのため、それらの技能を伸ばすための学習を設定したり、実態に合っている生徒に役割分担してもらったりする必要がある。また、役割が当たっていない生徒が役割の当たっている生徒に助言をするなど、助け合うための場面を設定する必要もある。

話し合いでは、中心になる生徒がリードをすることでグループとしての目標である買い物の計画を立てて発表することができたが、話し合いが一部の生徒のみに偏って決められてしまう様子が見られた。改善点としては、話し合いを充実させるためにグループ分けを生徒の実態に応じて教師で行い、一部の生徒だけでなく全員が責任をもって個々の役割を意識した話し合いができるようにすることが必要である。

実践レポート

単元・題材名 (授業名)	楽器を演奏しよう (器楽)	生徒	窯業科1年生徒8名 農業科1年生徒8名 家庭科1年生徒8名
		場所	音楽室
日時	平成 29 年 12 月 5 日(火)4校時	指導者	T1:石田 T2:村瀬 T3:高山 T4:海田

① 互恵的な相互依存関係

本単元では、ハンドベルやトーンチャイムなどの楽器を用いて、一つの旋律をチームで演奏することを目標として取り組むこととした。ハンドベルやトーンチャイムは、全ての楽器が単音であり、例えば、ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ドのハ長調の音階を演奏するためには8つの楽器を使用することとなる。旋律を完成させるためには、全員が必ず楽器を演奏する必要があるため、必然的に全員が協力しなければ達成できないような関係を設定できる教材である。

② 対面的なやりとり

今回演奏曲として設定した『ドレミの歌』は、生徒全員が知っている楽曲であり、音やリズムの違いを生徒たち自身が感じやすいため、自然と生徒が相互に教え合ったり、助け合ったりする様子が見られた。例えば、本来鳴らすべきタイミングで音を鳴らすことができなかった生徒や違う音を同時に鳴らしてしまった生徒に対して、他生徒が教えてあげたり、テンポが遅くなってきたことを感じて、早めに音を鳴らして演奏を立て直そうと助け合ったりしていた。

③ 個人としての責任

自分の担当する楽器（音）に対して責任をもって取り組むことを指導した。その音が鳴らなければ、演奏が止まってしまうため、高い責任力と集中力をもって演奏に取り組むことができていた。

④ 協同学習スキル

本授業では、自分の意見を主張しながら練習を進めることや、グループでの発表を聞いて、良かった点について意見を述べたり、アドバイスをしたりすることをねらいとして取り組んだ。練習中の様子では、もっとテンポを速く演奏した方が良いという意見や、演奏する際の並び方について意見を主張し合いながら練習を進める様子が見られたが、言葉遣いや注意の仕方については課題が見られた。具体的には、間違った生徒に「違うだろ。」と厳しく注意をすることや、仲間を責める一方で、間違ったときに謝ることができないことなど、集団で生活するスキルに関する課題であった。今後は、間違いがあったときに素直に謝ることができること、人が失敗しても許すことができることの2つの協同学習スキルについて、仲間との関わり方にルールを設けて指導をしたり、良い関わりができていた生徒を称賛したりすることで指導していきたい。

⑤ チームの振り返り

3つのグループに分かれてそれぞれが担当する楽器の練習を行った後、自分たちの練習の成果を音楽室で発表し合った。発表後には必ず発表したグループに対して拍手をして、鑑賞していたグループから感想やアドバイスを発表した。鑑賞していたグループからは、「楽しそうに演奏していてよかった。」「失敗しても立て直そうと頑張っている様子が見えた。」「もっと叩き方を均等にしたいほうがいい。」「楽器がうまく響いていないので、持ち方を工夫した方がいい。」とアドバイスや感想の声が上がり、そのアドバイスを聞いて、演奏をしたグループは「もっと揃えた方がいい。」「自分勝手に演奏してはいけない。」「せっかちなことが分かった。」など、振り返って考えることができた。

1 学年 音楽科 学習指導案

単元・題材名 (授業名)	旋律を演奏しよう(器楽)	生徒	窯業科 1年生徒8名 農業科 1年生徒8名 家庭総合科 1年生徒8名
		場所	音楽室
日時	平成29年12月12日(火)4校時	指導者	T1:石田 T2:村瀬 T3:高山 T4:海田

1 授業のねらい

(単元の目標)

- ・自分の担当する楽器を、責任をもって演奏することができる。
- ・仲間の様子や演奏する音を聞きながら、合わせて演奏することができる。
- ・器楽演奏を通して音階や音名に関心をもつことができる。

(本時の目標)

- ・自分の担当する音を理解し、責任をもって演奏することができる。
- ・仲間と協力して練習を重ね、一つの演奏を完成させることができる。

2 生徒について

- ・本教科の授業の際には、学級単位でグループ活動を主とすることが多く、その際には自分達で話し合いを進めたり、練習をしたりする姿が多く見られる。
- ・前時にも、本時と同じように器楽演奏に取り組んでいる。その際にも学級単位でグループ活動を行ったが、生徒達の言語活動は充実していた。
- ・本時はあえてこれまでに音楽の授業として取り組んだことのないグループ編成で器楽演奏を行うことによって、協同学習に対する取り組み方の違いやその効果についても見極めていきたい。

3 指導計画

第1回 11月28日 : 学校祭の反省と今後の学習についての説明

第2回 12月 5日 : ハンドベルやトーンチャイムを用いた器楽の学習 1 回目

第3回 12月12日 : ハンドベルやトーンチャイムを用いた器楽の学習 2 回目 (本時)

4 本時の展開

	学習活動	生徒の活動	教師の活動	教材教具
導入 5分	・始業挨拶 ・前回の復習 ・本時の説明	・農業科の日直が挨拶をする。 ・器楽演奏の目的や目標を理解する。 ・本時の学習内容を理解する。	・授業開始の合図をする。 ・前回の内容を生徒に質問しながら確認していく。 ・本時も前回同様、ハンドベルやトーンチャイムに取り組むことを伝える。 ・今回は学級ごとの活動ではなく3つのグループに分かれることを伝える。	・ホワイトボード

			<協同学習の要素や配慮事項> ・目標を共有できるよう丁寧に本時の目的や目標を説明し、全員の協力が必要であることを確認する。(①)	
展開 35 分	・グループの発表 ・楽器決め ・手順確認 ・ルールの確認	・教員の提示したグループに分かれる。 ・グループで話し合って楽器を決める。 ・手順に沿って行動を開始する。 ・練習中の2つのルールを確認する。	・グループを発表し、音楽室入口側を A グループ、中央を B グループ、窓側を C グループとして座らせる。 ・取り組む楽器をグループで話し合って、グループ同士で重なった場合にはじゃんけんをして決める。(5分) ・取り組み方の手順を確認する。 ①どの音を担当するかグループで話し合って決める。 ②取り組む楽曲を決める。 ・RPG ・校歌 ・海の声 ③担当する楽器の音を決める。 <協同学習の要素や配慮事項> ・役割（担当する音）を割り当てることで、グループ活動の間、担当する楽器に責任をもたせる。(③) ④決まったら楽器と楽譜を取りに来る。 ⑤各場所に分かれて練習をする。 A グループ：音楽室 B グループ：農業科教室 C グループ：窯業科教室 ※このとき、教員は楽譜の指差しのみを担当すること、練習の声掛けは自分たちで行うことを伝える。 ⑤12:00 になったら音楽室に集合することを伝える。 ・2つのルールを確認する。 ○練習中、間違った仲間に対して注意をするのではなく教えてあげること。 ○自分が間違ったときには素直に謝ること。 <協同学習の要素や配慮事項> ・前回の授業で課題となった、仲間への注意の仕方や、素直に謝ることについて、授業のルールとして設定することで意識的に関わり方を正すことができるようにする。(④)	楽譜 ハンドベル トーンチャイム 卓上ベル

	練習開始	- 担当教諭の指示に従って練習を開始する。 - 教師からのヒントを確認する。	- グループの担当教諭は生徒から楽譜を受け取り、練習の進行を手助ける。 <協同学習の要素や配慮事項> - 言語活動が充実するように、教師の言葉がけは可能な限り減らし、演奏の出来を見ながら必要に応じて生徒に言葉を掛けて支援する。(②) - 協同学習に消極的であることや、ルールが守られていないときに、教師から助言をする。 【助言内容】 - 今日の2つのルールはなんだった？ - 歌いながら演奏してみるといいよ。 - 演奏するときの強さはどう？ - 音を変えてみてもいいかもね、皆で相談してみたら？ - 発表まであと〇〇分だよ！ - もう1回練習してみようか。 - うまくできていない部分はどこだと思いう？話し合ってごらん。	
	- 発表の手順の確認 - 発表	- 音楽室に集合し、発表の手順を知る。 - 発表順を決めて、発表を行う。	- 発表の手順を確認する。 - 発表する順番を決める。 - 発表する。(鑑賞するグループは楽器の音を出さずに静かに発表を聞く) - 鑑賞したグループの生徒は演奏の良かった点、もっと改善できる点についてアドバイスをする。 - アドバイスを受けて、発表したグループは自分達の演奏の振り返りをする。 - 教師のピアノ伴奏に合わせて発表を行う。	ピアノ
整理 5分	- まとめ - 挨拶	グループごとに再度自分たちの演奏について反省をする。	- 全ての発表が終わったら、グループごとに再度自分達の演奏についてワークシートを用いて反省を行う。 <協同学習の要素や配慮事項> - 自分の与えられた楽器を、責任をもって演奏することができたか、2つのルールを守ることができたかについてワークシートを用いてグループで振り返る。(⑤)	ワークシート

5 指導上の工夫

① 互恵的な相互依存関係

授業の初めに、仲間同士で協力し合って一つの旋律を演奏することを目的としていること、自分の役割に責任をもって取り組むことを本授業のねらいとしていることを生徒に明確に伝えることで、意識的に同じ目標をもって達成に向けて協力して取り組むことができるように指導していく。

② 対面的なやりとり

前回の授業では、学級単位での活動とした。しかし、今回は学級単位の活動からグループ活動へと変更し、助け合ったり、話し合ったり、励まし合ったりする活動が活発に行われやすいグループに編成した。授業としても学級単位ではないグループ活動は初の試みであるが、メンバーが変化しても、教え合ったり助け合ったりするなどの対面的なやりとりが充実することをねらいとして、グループを構成した。また、練習活動が活発化するような教師側の助言内容をいくつか設定し、使用する楽譜の裏に印字しておくことで、T1と同じようにT3、T2が言葉がけをしてグループの指導を行えるように工夫を行った。

③ 個人としての責任

本時で使用するハンドベルやトーンチャイムは単音の楽器であり、例えば、ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ド、のハ長調の音階を演奏するためには8つの楽器が必要となる。本時に課題曲としている楽曲の旋律は、8つの音を必ず使用する楽曲であるため、一人一つ楽器を担当することで、必然的に個人の責任が生まれるように題材を設定している。

④ 協同学習スキル

本時に指導のねらいとしている協同学習スキルは、間違いがあったとき、素直に謝ることができること、人が失敗しても許すことができることの2つである。この2つを予め本時の授業のルールとして設定し、生徒に提示することで意識的に取り組めるようにした。また、このルールを楽譜の表面にも掲示することによって、演奏をしながら、ルールにも目が留まるように工夫を行った。

⑤ チームの振り返り

器楽演奏では、楽曲の練習を繰り返すことで、必然的にテンポが合わない、旋律が上手に流れないなどの課題が生じてくる。生徒達が演奏を通して課題点に気づき、上達するために何度も練習を重ねることで、チームの振り返りを自然に行うことができるよう本題材を設定している。また、助言内容を用いて教員が的確にグループの助言をすることで、チームの振り返りを促せるような工夫を取り入れている。さらに、練習の成果を全体場で発表し、他グループからの評価を聞きながらグループの反省をすることで、客観的な評価を取り入れながらグループの反省を行うことができるようにしている。

6 指導の効果

本時の指導のねらいである、間違いがあったとき素直に謝ることができること、失敗しても許すことができることの2つの協同学習スキルに対する指導の効果であるが、仲間に優しく教えてあげること、間違ったらごめんなさいと謝ることとルールを設定して生徒に伝えることで、意識して仲間との関わり方について、言葉遣いを正そうとする様子が見られた。しかし、ルールを伝えるタイミングがグループに分かれた後、練習を始める直前であったため、授業の始めからルールを伝えた方が、授業全般をととして言葉遣いを正すように意識付けをすることができ、より効果的であった。

7 今後の課題

個人が担当する楽器を確実に演奏しなければ旋律が成り立たない、個人としての責任の強い題材であったため、教え合ったり助け合ったりするなどの対面的なやり取りは充実していたが、振り返りに設ける時間が少なかったことで、ややグループ活動としての取り組みに対する反省と改善の要素が薄かった。授業全体の時間配分のバランスが今後の課題である。また、言葉遣いや素直に謝ることなど、集団活動スキル全般に関する要素が依然足りていないため、スキルの向上に向けて、ねらいを絞って手立てを考えて、取り組んでいく必要がある。

※ 授業を振り返って

ハンドベルやトーンチャイムなどの単音楽器の演奏は、協同学習として取り組みやすい題材であると感じた。一方で、練習にかけける時間と振り返りにかけける時間配分のバランスは今後改善していく必要がある。また、今回の授業ではグループを変更していること、課題曲を選択制にしていること、取り組みに対するルールを設けていることと、前回の学習に比べて生徒が取り組むべき内容が多かったと感じる。振り返りにかけける時間を確保し、対面的なやりとりをより活発化していくためには、練習までの取り組み段階についても見直し、活動内容を絞っていく必要があると感じた。

実践レポート

単元・題材名 (授業名)	楽器を演奏しよう (器楽)	生徒	窯業科1年生徒8名 農業科1年生徒8名 家庭科1年生徒8名
		場所	音楽室
日時	平成 29 年 12 月 12 日(火)4校時	指導者	T1:石田 T2:村瀬 T3:高山 T4:海田

① 互恵的な相互依存関係

前回の活動と同様に、ハンドベルやトーンチャイムなどの楽器を用いて、一つの旋律をチームで演奏することを目標として取り組んだ。前回は学級ごとの活動としたが、本時はグループに分かれて活動を行うこととした。各グループで話し合っており取り組む楽曲を決め、演奏に必要な楽器を準備してそれぞれが担当を決めて練習を行ったが、各グループの生徒全員が自分の担当する楽器について責任をもって演奏するという役割を果たすことができた。また、練習中は楽器を鳴らすタイミングが分からない生徒に対して名前を呼んで気づかせてあげたり、どこまで演奏したかを教えてあげたりと、協力して演奏を成功させようと努力する姿がそれぞれのグループで見られた。

② 対面的なやりとり

前回は演奏曲を1曲に固定したが、今回は3曲の中から1曲をグループで話し合っており選ぶこととした。3曲ともに耳なじみのある曲ではあったが、音の高さやリズムを掴むことが難しい生徒も多く、そういった苦手のある生徒に対して、次に鳴らすべき音を教え合ったり、音の高さが分かりやすいように楽譜に印をつけて助け合ったりと、教師の言葉がけがなくても自分達で旋律を演奏しきるという目標をもって、教え合い助け合う姿が何度も見られた。しかし、間違えに気付いて声を掛ける生徒が固定されてしまっていたこともあり、グループにリーダーを設けて、リーダーが仕切りながら周りの意見も取り入れることができるような体制づくりを行うことで、より言語活動が活発化したのではないかと感じている。

③ 個人としての責任

前回と同様に、自分の担当する楽器(音)に対して責任をもって取り組むことを指導した。その音が鳴らなければ、演奏が止まってしまうため、高い責任力と集中力をもって演奏に取り組むことができていた。

④ 協同学習スキル

前回の学習の中で、仲間に対して厳しい口調で叱ったり、間違っても謝らなかつたりといった様子が見られ、間違いがあったときに素直に謝ることができること、人が失敗しても許すことができることの2つの協同学習スキルについて課題があることが分かった。そのことから、今回、この2つの協同学習スキルについて授業のルールとして、仲間には優しく教えてあげること、間違ったらごめんなさいと謝ることと、生徒に提示した。結果、意識的に言葉遣いを正そうとしたり、「ごめん」といった声が聞こえたりする場面が増えたと感じた。しかし、ルールを伝えるタイミングが開始時ではなく練習に取り組む前であったため、開始時の段階でルールを説明した方が、より授業の中で言葉遣い意識して気を付けることができたのではないかと反省している。

⑤ チームの振り返り

前回同様、3つのグループに分かれてそれぞれが担当する楽器の練習を行った後、自分達の練習の成果を音楽室で発表し合う形で振り返りを行った。前回は口頭のみでの振り返りであったが、今回はワークシートを用いて、鑑賞したグループの感想やアドバイスをワークシートに記入した後に自分の意見として発表するように形式を変更した。他グループに対するアドバイスや教え合いを活発化し、自分のグループの振り返りの参考材料とするために取り入れたワークシートであったが、計画全般的に時間が足りず、ワークシートに記入する時間や、他グループに対して発表する時間も少なかったため、効果的な使用には至らなかった。振り返りに十分な時間を確保していくことが今後の課題である。

実践レポート

単元・題材名 (授業名)	創作リズム (身体表現)	生 徒	3年生徒20名
		場 所	音楽室
日 時	平成29年8月22日 (火) 4校時	指 導 者	T1:鐘ヶ江 T2:岩城 T3:山本

① 互恵的な相互依存関係

「グループに分かれ、1人1小節リズムを作成し、それをつなぎ合わせてグループで1曲を作る」という課題を提示した。1人でも作成できないと曲を完成させることができないため、“必ず取り組まなければいけない”という意識を持たせること、“完成させるために知識やコミュニケーションが必要だ”と実感させることを意図して盛り込んだ。その結果、待ちの姿勢ではなく、自分から話し合いを進めようという意識の向上につながった。

② 対面的なやりとり

グループに分かれ、1人1人が考えた1小節のリズムを仲間に教え合う学習を行った。「伝える」「聞く」というコミュニケーションの基本的な力の向上を目的としたが、「〇〇分までに終わってください。」という条件を提示したことで、終わりの時間を意識しながら発表する順番や教え方など、各グループで工夫する様子が見られた。また、発言するまでに時間がかかってしまう生徒も時間をかけずに伝えることができたり、仲間の説明の中で理解できなかったことを何度も聞くなど積極的にコミュニケーションをとって解決しようという姿勢が見られた。

③ 個人としての責任

4分音符や8分音符など、学んだ音符を組み合わせるリズムを創作するためには知識を習得することが必要となるため、テストを何度か行うなど、知識面に対しての指導を行った。生徒は、テストの後に創作する活動があることを理解しているため、何度も質問しながら学習に取り組み、その結果、「4分音符と2つと8分音符を4つ組み合わせました。」と発言するなど、その後の活動に向けて、理解を深め、1人1小節リズムを全員が創作することができた。

④ 協同学習スキル

授業の中盤に、一度全グループが1曲完成させて全員の前で発表すること、発表しているグループ以外は鑑賞する活動を行った。その際に、それぞれのグループの良い部分と、そうではない部分について話し合う場面を設定した。それは、周りの様子を見て、「良い部分は取り入れ、そうではない部分は真似をしない。」という働いたときにも必要な力を身につけさせることをねらいとした。結果として、「他のグループの良いところを取り入れよう。」「もっとしっかり見よう。」という発言が多く出る話し合いの場となった。また、良くない部分については、グループ間で助言し合ったことで、改善に向けたヒントを得る学習の機会とすることができた。

⑤ チームの振り返り

本時は、“話し合い (創作) → 発表・鑑賞 → 話し合い (創作)” というように、一度グループでリズムを創作した後に、発表したり他のグループの発表を鑑賞したりすることによって、発表してみて気付いた改善点や他のグループの良い点等を参考に再度話し合い、更に満足度の高いリズムを創作するという授業展開を行った。その結果、まずはやってみるという姿勢をもつことの大切さや周りの良さに気付くこと、試行錯誤してより良いものを創るという今後生きていく上で必要な考え方について、音楽の授業の中で実感させながら伝えることができた。

3 学年 音楽 学習指導案

単元・題材名 (授業名)	玄関コンサートに向けて(合唱・第2回)	生 徒	3年生徒18名
		場 所	音楽室
日 時	平成29年12月12日(火)3校時	指 導 者	T1:鐘ヶ江 T2:岩城 T3:山本(不在)

1 授業のねらい

(単元の目標)

- ・玄関コンサートに向けて、歌を仕上げることができる。
- ・より良い表現をするための要素について考え、工夫することができる。

(本時の目標)

- ・担当した部分の歌詞を覚えることができる。
- ・音程の感覚をおおよそつかむことができる。

2 生徒について

- ・学年全体的に、どの授業においても意欲的に学習に取り組むことができるようになってきた。
- ・男子に比べ、女子の方が意欲的に話し合ったり、歌ったりすることができる。
- ・活動内容によっては、人任せになってしまう生徒がいる。

3 指導計画

- 第1回 12月 5日 : 玄関コンサートで歌う曲の選定
- 第2回 12月12日 : 1曲目の練習(本時)
- 第3回 12月21日 : 1曲目と2曲目の練習
- 第4回 1月23日 : 2曲目と3曲目の練習
- 第5回 2月 6日 : 3曲目の練習
- 第6回 2月13日 : 3曲目練習、本番に向けた最終確認

4 本時の展開

	学習活動	生徒の活動	教師の活動	教材教具
導入 5分	・グループ分け ・挨拶	・男子パート、女子パートを共に2つ、合計4つのグループに分かれる。 ・指名されたグループはタイミングとテンポを合わせられるよう工夫して始まりの挨拶をする。	・グループに分かれるよう指示する。(グループ名は、男A、男B、女A、女Bとする) ・挨拶するグループを指名し、タイミングとテンポを合わせて、挨拶をするよう伝える。 <協同学習の要素や配慮事項> ・本時は、メンバー全員の協力と一人ひとりの意識が大切だということを導入で実感できるよう工夫する。(配慮①)	

	・ 本時の学習内容と目的の確認	・ 本時の学習内容と目的について知る。	・ 本時は「楓」を歌唱することを伝える。 ・ それぞれのグループで担当した歌詞を覚えることで、一つの曲を完成させることを伝える。 <協同学習の要素や配慮事項> ・ 各グループが責任を果たし、協力し合うことで、一つの曲が完成することを伝える。(①)	
展開 40 分	・ 歌唱練習 ・ 歌唱① ・ グループ練習	・ 担当する箇所（歌詞）を知る。 ・ 担当する 1 行を決める。 ・ 歌詞を見ながら全員で歌唱する。 ・ 各グループで、担当箇所の歌詞を覚えることと、音程をおおよそつかむための練習を行う。 ＜楓＞ 女A：1 番の A メロ 女B：2 番の A メロ 男A：1 番の B メロ 男B：2 番の B メロ	・ グループに 1 枚、A 3 版の歌詞を配布し、各グループが担当する箇所（歌詞）を伝える。 ・ 担当箇所の中でも、さらに 1 行あたりの担当者を決めるよう伝える。 ・ 担当箇所と音程を簡単に把握できるよう、一度歌唱する。 ・ 歌詞を見ないで練習することを伝える。 ・ 担当した 1 行に関しては、必ず責任を持って歌詞を覚えて歌うことと、仲間が分からなかった場合は教えること、最終的にグループが担当した箇所を全員が歌えるよう練習することを伝える。 <協同学習の要素や配慮事項> ・ 人数と実態によっては、1 行を複数で担当することを可とする。(配慮②) <協同学習の要素や配慮事項> ・ 必ず 1 行は覚える。(③) ・ 仲間と教え合いながら解決する。(②) ・ 分からない場合は聞き、分かるところは教える。(④) ・ 分かりやすい伝え方や、効果的な練習方法など、仲間の良いところを見つけた場合は、模倣をするなど取り入れる。(④)	・ A 3 版の歌詞

	・発表・鑑賞 ・各パートで交流	・Aグループ（男・女）が一番を発表する。 ・Bグループ（男・女）が二番を発表する。 ・Aグループ（男・女）が一番の歌詞とおおよその音程をBグループに教える。 ・Bグループ（男・女）が二番の歌詞とおおよその音程をAグループに教える。	・一番をAグループ（男・女）が、二番をBグループ（男・女）が歌うよう指示し、伴奏する。 ・時間を指定し、AグループがBグループに一番を教え、その後にBグループがAグループに二番を教えることを指示する。 <協同学習の要素や配慮事項> ・個人やグループが担当した箇所を相手のグループに教える。(②) ・男女各パートの完成に向けて練習する。(①) ・分からない場合は聞き、分かるところは教える。(④)	
	・歌唱②	・男子パート、女子パートで円を作り、二番の終わりまで全員で歌う。	・どの程度覚えることができたか一番と二番を全員で歌唱することを伝え、伴奏する。	
	・振り返り	・男子と女子の各パートで、到達度について振り返る。	・男子パート、女子パートの歌詞を覚えて歌えたか男女に分かれて振り返りを行うよう伝える。 <協同学習の要素や配慮事項> ・個人やグループの取り組み方とその結果について振り返る。(⑤)	
	・パート練習	・振り返った内容を基に練習に取り組む。	・振り返った内容を基に、男女に分かれて再度練習を行うよう伝える。	
	・歌唱③	・全員で、二番の終わりまで歌う。	・再度、一番と二番を全員で歌唱することを伝え、伴奏する。	
	・全体練習	・間奏以降の歌詞と大まかな音程について練習する。	・間奏以降の歌詞と音程について確認する。	
	・歌唱④	・曲の最初から最後まで歌う。	・曲の最初から最後まで歌うことを伝え、伴奏をする。	

整理 5分	・ 次時の確認 ・ 挨拶	・ 次回の授業の内容を確認する。 ・ 全員でタイミングとテンポを合わせられるよう工夫して終わりの挨拶をする。	・ 次時の説明をする。 ・ 全員でタイミングとテンポを合わせて挨拶するよう伝える。	
----------	---	---	--	--

5 指導上の工夫

① 互惠的な相互依存関係

個人が担当した歌詞を覚えることでグループとしての担当部分を作り上げ、グループに与えられた箇所を覚えることで、協力し合って全体で一つの曲を完成させる。

② 対面的なやりとり

グループに与えられた責任を果たすために、個人が覚えた歌詞をグループ内で教え合う。また、男女の各パートが担当する歌詞を覚えるために、男Aグループと男Bグループ、女Aグループと女Bグループで教え合う。

③ 個人としての責任

一人1行歌詞を担当し、グループ内や他のグループと交流するときに教える。そのために、最低限自分が担当した1行は確実に覚えなければいけないという責任をもつ。

④ 協同学習スキル

グループに与えられた責任を果たすためにグループ内の仲間と、全体に与えられた課題を解決するためにパート内の仲間と分からない場合は聞き、分かるところは教え合う。

また、練習の際に分かりやすい伝え方や、効果的な練習方法など、仲間の良いところを見つけた場合は、真似をするなど取り入れることで、個人またはグループのスキルアップにつながる。

⑤ チームの振り返り

男子と女子の各パートが、一番と二番の歌詞を覚えることができたか振り返り、パートとして良かったところや足りなかったところを話し合いの中で明らかにすることで、その後の練習に生かす。

振り返って終わりではなく、最後の発表につなげるために努力するという、振り返ったことを基に次につなげるという姿勢を身につけることができるよう、授業の途中に振り返りの学習を設定する。

6 指導の効果

本時は、「歌詞を覚える」というインプットに重点を置いた授業を行ったため、話し合いをメインで行うというよりは、組織の中の位置付けを理解し、全体のために個人として努力することを目的とした授業を行った。そのために、一人一人が本時の中で何をしなければいけないか「個人の責任」を明確にしたこと、チームや各パートで目的を共有し、「互惠的な相互依存関係」を確実に機能するよう工夫したことで、授業の終わりまで生徒が主体的に取り組むことにつながった。また、授業の終盤ではなく中盤に「チームの振り返り」を行ったことで、「協同学習スキル」をより意識しながら、その後の「対面的なやりとり」が活発になった。その結果、全てのチーム、パートが目的を達成し、学年全員で曲を完成させることができた。また、3年間同様の授業を積み重ねてきたことにより、簡単な指示で生徒が与えられた責任を果たすとともに、自分達で創意工夫しながら学習に取り組むことができるようになった。

7 今後の課題

授業を行った結果、チームの振り返りを授業展開のどの場面に取り入れるかが重要なポイントであった。今後も、実践を積み重ねながら工夫していきたいと思う。また、「仕掛け」が有効的に働かなかったときも想定して、指示の出し方や、理解が深まるような発問の仕方、時間指定や一人ひとりの実態把握とそれを踏まえた目標や配慮事項の設定など、様々な指導のスキルを持っていくことが今後の課題だと思う。

※ 授業を振り返って

協同学習に限らず、指導の基本をしっかり押さえていないと授業がうまくいかないため、授業を行う上で必要な要素を効果的に組み合わせながら授業を展開していくことが大切である。その上で、協同学習の枠組みに当てはめながら授業の仕組みを考えていくと“主体的・対話的で深い学び”につながることを実感した。そして、改めて最終的に“深い学び”にどのようにつなげていくかが難しく、またそのための効果的な工夫を考える楽しさにも気付くことができた。

今後も、実態把握する力や、将来を見据えて目標や指導内容を設定する力、他者との関係に気を配りながら学びを最大限に引き出す力、教科指導に必要な知識や技能など、自分自身の指導力の向上に向けて努力していきたい。そして、それらを機能させるために協同学習を軸とした“主体的・対話的で深い学び”に向けた授業力も向上していきたい。

実践レポート

単元・題材名 (授業名)	玄関コンサートに向けて(合唱・第3回)	生 徒	3年生生徒18名
		場 所	音楽室
日 時	平成29年12月22日(火)3校時	指 導 者	T1:鐘ヶ江 T2:岩城 T3:山本

① 互恵的な相互依存関係

男女各2グループ、計4グループに分かれ、1グループあたり4行程度の歌詞を担当する。グループ内では一人1行担当し、一人ひとりが確実に音程を覚えることでグループに与えられた責任を果たすこと。そして、グループで覚えた音程を、男子パート同士、女子パート同士で教え合い歌うことで1曲が完成するという設定で授業を行った。その結果、全体の目標を達成するための一人当たりの活動量、グループ当たりの活動量が明確になった状態で授業を展開することができ、生徒は、程良い緊張感の中で学習に取り組むことができたと思う。

② 対面的なやりとり

グループに与えられた責任を果たすために、個人が覚えた歌詞の音程をグループ内で教え合う。また、男女の各パートが担当する音程を覚えるために、男子グループ同士、女子グループ同士で教え合う学習を行った。仲間同士で達成しなければいけない目標が共通理解できていたこと、また、「〇〇分までに終わってください。」という条件を提示したことで、終わりの時間を意識しながら、積極的な教え合い、学び合いを促すことができた。さらに、自分が担当した1行においては、自信を持って教えることができるため、堂々とやりとりができる生徒が多く見られた。

③ 個人としての責任

一人1行歌詞を担当した。それは、グループ内や他のグループと教え合う際に必要になるため、最低限自分が担当した1行の音程は確実に覚えなければいけないという責任を感じさせることができた。また、音程を覚える時間を前半に設定したが、それ以降は基本的に教師が改めて音程を教えることはしないことを条件として伝えていたこと、グループ内外の仲間と教え合うときに自分の担当箇所について聞かれた場合は答えられる状態でなければいけないことなど、その後に想定される内容についても適宜伝えていたため、一人ひとりが集中して練習に取り組む時間となった。

④ 協同学習スキル

個人が担当した歌詞の音程をグループ内で教え合うことでグループに与えられた歌詞を歌えるようにすること、グループが担当した歌詞の音程を同じパート同士で教え合うことで1曲を完成させるということを生徒全員が理解できていたため、協同学習スキルは伝えてはいたが、ほぼ自主的に分からない箇所は聞き、担当したところや分かるところは教えるという活動ができていた。

⑥ チームの振り返り

男女の各パートで、一番と二番の歌詞の音程を覚えることができたか振り返り、パートとして良かったところや足りなかったところを話し合いの中で明らかにする場面を授業の中盤に設定した。その結果、振り返って終わりではなく、目的達成のため、より良い曲にするために、課題を明確にしてパート内で共通認識し、その後の練習に取り組むという学びのサイクルを意識できるような授業を行うことができた。そして、振り返った後はより質の高い練習を生徒達自身で考えて実行することができていた。

まとめのレポート

教科・形態名	音楽科	部会メンバー	石田、鐘ヶ江、村瀬
--------	-----	--------	-----------

(1) 音楽の指導内容や特性

知的障がい教育（高等部）における音楽科では、表現及び鑑賞の能力を伸ばし、自己選択によって、音楽活動への意欲を高めるとともに、生活を明るく楽しいものにする態度と習慣を育て、生涯を通じて音楽を楽しむことができるようにすることを目標としていることが特徴である。また、働く力を育む要素が多様に盛り込まれている点も特徴的であり、歌唱では周りと協調する力や生き生きと発声する力、身体表現では自分の想像を具体化して表現する力、鑑賞では見て聴くことで曲の特徴や良さに気付く力など、人との関わりや思考力、判断力を養う要素が多くある。

音楽科の内容としては、主として小学部や中学部で学習してきたことを基盤に、さらに発展性と深まりのある学習が進められるように、いろいろな種類の音楽に親しみ、音楽の美しさを感じ取りながら聴くなどの鑑賞に関すること、音楽を聴いて曲の特徴やイメージなどを感じ取り、創造的に身体の動きで表現するなどの身体表現に関すること、打楽器や旋律楽器などの演奏の仕方に慣れ、その特徴や音色を生かしながら気持ちを込めて合奏や独奏をするなどの器楽に関すること、歌詞の内容を感じ取って、独唱、斉唱、簡単な合唱などをしたり、二部合唱、オペレッタなどによる表現に慣れ、楽しみながら歌ったりするなどの歌唱に関することなどが挙げられる。

高等部段階の生徒は、心身の発達に伴って、精神的にも成長し、社会性も広がる。音楽に対する感性も豊かになり、それぞれの生徒の好きな音楽の種類が明確になってくる。このような生徒の実態を踏まえて、魅力的な教材の選択と段階的な指導を工夫することによって、音楽活動への意欲を育てることが大切である。

(2) 音楽における協同学習の授業づくり

1 互恵的な相互依存関係

- ・男女それぞれのパートが同じパートの相手と音程やテンポをそろえて歌うことを目標に活動を行う。
- ・全員が歌詞を覚えて歌うことを目指す。（少人数のグループごとに発表し、成果を確認する）
- ・各自でダンスを考え、グループになって考えたダンスについて話し合い、一つのダンスを完成させる。
- ・学年で分担してパフォーマンスを考え、全体で一つのパフォーマンスを作り上げる。
- ・全員で一つの楽曲を完成させることを目標に、演奏活動を行う。

2 対面的なやりとり

- ・男女それぞれのパートが発表し、相手のパートに対して良い点や改善点を伝え合う。
- ・グループでダンスについて話し合う際に、良い点や改善点を論議し合う。
- ・強弱などの表現方法をグループで話し合って決め、発表して互いのグループの良い点を褒め合う。
- ・ダンスや歌うことが得意な生徒が、苦手な生徒に教える。
- ・学年で輪になってパフォーマンスの構成を話し合う。
- ・楽曲を演奏するために、話し合ったり、助け合ったり、励まし合ったりする。

3 個人としての責任

- ・少人数グループで合唱練習をして、一人一人が歌っていることを確認できるような場面を設定する。
- ・一人一人が考えたダンスを発表する場面を設定する。
- ・身体表現の練習では、動きを理解していない仲間を確認して、仲間同士が個別に教え合うことで個人の責任としての意識を高める。
- ・一人一つの楽器を担当し、担当した音を必ず演奏する。

4 協同学習スキル

- ・相手の歌声を聴いて、音程を合わせる。
- ・相手の身体表現を見ることで、テンポの速さやリズムの感じ方について自分の表現の参考にする。
- ・一人ずつ順に声を重ねることで、音量や声の響きが変化することを感じさせる。
- ・身体表現では、声を出して拍をカウントする。
- ・自分が演奏に失敗した際に謝ることができる。また、仲間が失敗した際に許すこともできる。

5 チームの振り返り

- ・自分たちの合唱やダンスについて、ハーモニーや声の音量、音程やテンポなどについて振り返りを行う。
- ・グループや学年ごとにダンスを発表して、グループや他学年同士で良いところや改善箇所を伝え合う。
- ・演奏の上達を目指して反省し合う。

(3) 音楽で協同学習を取り入れるメリット

歌唱では

- ・相手の歌声に耳を澄ませて音程を合わせたり、体の動きを見てまねをしたりすることで、周りを見たり、他者を感じて合わせたりすることができる。
- ・全体で一つの物を作り上げる意識が芽生える。

鑑賞では

- ・歌詞の内容から心情や背景を自由な発想で読み取り、考えを他者に伝えることができる。
- ・一つの曲を全体で鑑賞し、自由な発想で強弱を考え合って歌ったり、演奏したりすることができる。

身体表現では

- ・それぞれが自由に表現を考え、意見を合わせて一つのダンスを作り出すことができる。
- ・仲間の動きに合わせてたり、教え合ったりすることでダンスの向上を目指すことができる。

(4) 課題点

音楽科では、指導内容が協同学習につながることや協同学習の要素とつなげやすい内容が多くあり、協同学習スキルを明確に取り入れることで、歌やパフォーマンスの質や自発的に取り組む姿に向上が見られている。音楽の知識や技能が向上することで更なる自発性の向上を目指し、知識面の指導に重点を置く必要がある。

実践レポート

単元・題材名 (授業名)	デザイン・協同制作(モダンテクニック で「海の中」を表現しよう)	生 徒	全学科1年生徒24名
		場 所	美術室
日 時	平成29年12月5日(火)2～3校時	指 導 者	T1:泉谷 T2:内田 T3:小林 T4:小原

① 互恵的な相互依存関係

生徒全員がモダンテクニック(ローラー・ストロー・ぼかし網)を使って4枚の絵(海の中)を仕上げるという目標を持って活動に取り組み、協力しながら作品を仕上げることで達成感を感じられる題材を設けた。特に、話し合い活動において自分の意見を主張しながらも相手の意見を受け入れることができるように指導した。これによって、今まで個人的な活動が多かった美術であるが、生徒同士が協力して、モダンテクニックを使い「海の中」を表現する作品を作り上げる喜びを感じている様子が見られた。

② 対面的なやりとり

ローラー・ストロー・ぼかし網の担当を決めたり、色を決めたり、構成を考えさせたりするときに必ず一人一人が意見を言い、意見が違ったときに誰の意見を採用するかという相談をし合い相手との協調性がなくては話し合いが進まないように取り組んだ。6グループの内5グループは時間内で相談しながら、4枚の絵にストーリー性を持たせる話し合いを活発に行って、絵を描く準備ができ、絵を仕上げるためにモダンテクニックを分担し、助け合いながら4枚の絵を仕上げた。1グループは、意見を出し合う体制ができず、T2のアドバイスで最初に決めたリーダーを変えて話し合いをやり直すことで、製作にかかる時間が少なくなり作品を、仕上げることはできなかった。

③ 個人としての責任

グループごとにリーダーを決めさせ、リーダーを中心に話し合いを進めるようにした。全員が自分の意見を言わないと話が進まないように、テーマ決める・ストーリーを考える・使う道具の担当を決める・構成を考えるという4つの項目にわけて話し合わせるようにした。道具の担当を決め、担当箇所も決めてから絵の作成に取りかかるようにした。今まで個人の作品を各々が作ってきたが、今回はグループで決まったことを実行しなければならないということで意見をしっかりと聞いて実行することが求められ個人としての責任が大きくなる取り組みになった。

④ 協同学習スキル

それぞれが自分の意見を言うことでグループのメンバーの考え方が分かったり、自分の考えと違う考えがあることを認めながら、取り入れながら作品を作るように指導した。しかし、準備や片付けなどでは取り組むことを見つけない生徒もいたので、今後は、授業全体をとおして生徒同士が声を掛け合えるように指導する。

⑤ チームの振り返り

授業の最後に「振り返りシート」に取り組み、自分の振り返り・グループの振り返りをした。全体に発表して共有することができなかったのも、次回で共有し、他のグループの良いところなどを参考にする取り組みにした。

1 学年 美術科 学習指導案

単元・題材名 (授業名)	モダンテクニック (「海の中」を表現しよう)	生 徒	全学科1年生徒24名
		場 所	美術室
日 時	平成29年12月12日(火)2～3校時	指 導 者	T1:泉谷 T2:内田 T3:小林 T4:小原

1 授業のねらい

(単元の目標)

- ・モダンテクニックで表現することができる。

(本時の目標)

- ・モダンテクニック(ローラー・ぼかし網・ストロー)で「海の中」を表現することができる。
- ・3～4人で話し合い、協力してイメージした作品を作ることができる。

2 生徒について

- ・美術の得意な生徒と不得意な生徒とのギャップが大きい、全体的に意欲的に取り組む。
- ・これまで、個人の作品発表を通して表現力アップに取り組んできたことで、自分の考えをまとめて発表できる生徒が増えている。
- ・美術は、個人的な活動が多いので話し合いや協力して作品を作り上げることに慣れていない生徒が多い。

3 指導計画(共同学習を取り入れた授業を含む)

第1回 11月28日 : ローラー・ぼかし網・ストローを用いて森を表現する学習

第2回 12月 5日 : モダンテクニックで「海の中」を協同で仕上げる学習①

第3回 12月12日 : モダンテクニックで「海の中」を協同で仕上げる学習②(本時)

4 本時の展開

	学習活動	生徒の活動	教師の活動	教材教具
導入 10分	・挨拶 ・本時の学習内容の説明 ・目標設定 ・作品紹介	・家庭総合科日直が号令を行う。 ・本時の学習内容の説明を聞く。 ・グループの目標を記入する。 ・前時の作品紹介	・日直の号令で挨拶をさせる。 <協同学習の要素や配慮事項> ・本時の流れと前時との違いを黒板に視覚的に掲示する。(配慮⑮) ・書き方のポイントを説明してから机間巡視を行う。 ・前時の作品を紹介させる。	・ワークシート
展開 60分	・話し合い ・絵を作成する	・春夏秋冬の中からテーマを決める。 ・道具の担当がローテーションできるように決める。 ・構成を考える。 ・1枚の色画用紙を3～4人で分担して3種類の道具を使って表現する。	・テーマを決めさせる。 <協同学習の要素や配慮事項> ・全員協力して話し合い、個人の役割を明確にする。(③) ・準備・作成・後片付けで遊んで居る人がないように取り組ませる。	・海の中の写真 ・ローラー ・ぼかし網 ・ストロー ・色画用紙 ・厚紙ハサミ ・絵の具セット

	・後片付け	・声掛けしながら協力して後片付けを行う。 ・道具を洗う。	<協同学習の要素や配慮事項> ・3～4人のグループで協力して、1枚の絵を作成する。(①)	
整理 20分	・グループの振り返り ・作品説明 ・次時の予定 ・挨拶	・グループごとに学習を振り返る。 ・グループごとに作品を説明し、共有する。 ・次時の予定を知る。 ・家庭総合科日直が号令を行う。	・本時の目標に向かって活動することができたか確認させる。 <協同学習の要素や配慮事項> ・全員が、意見を出し合うことができたか、グループとして意見をまとめ絵に反映することができたか、本時の活動を振り返る(⑤) ・次時の予定を伝える。 (銅板の下絵を持って来る) ・日直の号令で挨拶をさせる。	

5 指導上の工夫

① 互恵的な相互依存関係

個人の役割をしっかりと果たさないと作品が完成しない状況を設定した。その結果、話し合いも自分の意見を出すだけでなく、相手に合わせたり他の人の意見に賛同できるよう設定した。

② 対面的なやりとり

テーマを決めたり、道具の担当を決めたり、色を決めたり、構成を考えるときに、お互いに意見を交換し、話し合いに協力的に参加できるよう設定した。前時の反省で討論できるように設定した。

③ 個人としての責任

自分の担当部所に責任を果たさないと良い作品ができあがらない。意見をしっかりと聞いていないとグループのイメージどおりの作品にならないので、ワークシートを利用して個人の役割を明記させ、反省につなげるよう設定した。

④ 協同学習スキル

他の人の考え方や、自分の考えと違う考えがあることを認めて素直な気持ちで聞き入れたり、他のグループの技法を取り入れながら作品を作り上げる。片付けの際に前時の反省からリーダーを中心に生徒同士が声を掛け合えるように指導した。

⑤ チームの振り返り

授業の最後にグループの振り返りをさせて、全体に発表させ共有させることで、他のグループの良いところなどを参考にすることで次の授業への意欲を高めさせる。

6 指導の効果

今までは個人の作品を作成することが多かったのでもいい加減に取り組んでも誰にも何も言われなかったが、本時では役割が当たること個人としての責任がグループの中で問われるので真剣に取り組む姿が見られた。担当を決めたり、構想を考えたりする中で今までは誰かまかせだった

生徒が積極的に意見を言うことができた。しかも自分の意見を言うだけでなく、相手の意見を取り入れて作品を作ることができた。

7 今後の課題

話し合いのスキルをもっと高くしていくことが必要と思われる。そのためには、授業の途中で作品交流をもっと多くして慣れさせていくことが必要と考える。グループの中でやることが分からない生徒への配慮もT2を中心に充実していくことが必要と思われる。個人の作品をつくる普段の授業に協同学習をどう取り入れていくかが課題と考えるが、当面片付けのときに声を掛け合うことで取り入れていきたいと考えている。

※ 授業を振り返って

モダンテクニックの授業は、2年目であるが今年は、話し合うテーマを分かりやすく工夫したことで生き生きと意見を言っている姿が新鮮だった。特に普段美術を得意としない生徒が海に潜った経験があることで自信を持って意見を言う場面を作れたことが良かったと思った。

改善すべきところは、生徒に活動させるときに活動のポイントを的確に伝えることである。特に今回は前時の作品の発表の仕方がまちまちであったので、同じ発表ができるように例を提示して説明することが必要と考えている。

まとめのレポート

教科・形態名	美術科	部会メンバー	泉谷、高田、内田
--------	-----	--------	----------

（１）美術の指導内容や特性

高等部の美術は、中学部における美術科の基礎的な造形活動の経験を基にして、表現及び鑑賞の能力を一層高め、基礎的、発展的な創作活動を充実して豊かな情操を培うことを目標としていることが特徴である。

美術科の目標としては、生徒の心身の発達の特性を考慮し、「表現」、「材料・用具」及び「鑑賞」の三つの観点で構成されている。造形的な創作活動では、ものの美しさを感じ取る感性を高め、自己のものの見方や感じ方に基づいて表現する力を伸長し、制作能力を高めて造形の喜びを味わい、これらの力を生かして一層豊かな生活ができるような人間性を育むことを重点としている。

創造的な造形作品は、生徒の内面の表出であり、個性の表現であることに留意し、多様な表現に発展させるとともに、自他の作品を丁寧に扱い、生活に生かす観点や他の作品の工夫点を学ぶ態度を養う特性がある。

（２）美術における協同学習の授業づくり

1 互恵的な相互依存関係

- ・準備や片付けをグループごとに協力し合って遂行する。
- ・グループごとに話し合い、協力して1枚の絵を完成させる。

2 対面的なやりとり

- ・グループで絵について話し合う際に、自分の意見を言って論議し合う。
- ・絵を描くことが得意な生徒が、苦手な生徒に描き方を教える。
- ・グループで話し合うときに積極的に意見を出し合う。

3 個人としての責任

- ・グループの中で役割を決め、責任を持たせる。
- ・一人一人が意見を言うことで、作品ができるという条件を設定する。
- ・一人一人が自ら行動することで準備、片付けがスムーズにできる。

4 協同学習スキル

- ・授業の最後にグループごとに作品を発表し、他のグループの良いところを取り入れる機会を作る。
- ・他の人の作品を見ることで、自分の作品制作の参考にする。

5 チームの振り返り

- ・目標について振り返りを行う。
- ・準備や話し合いや絵を描くときや後片付けのときに協力する。
- ・話し合いや発表のときに自分たちの作品について表現する。

(3) 美術で協同学習を取り入れるメリット

表現では

- ・一つの作品を作る過程で、話し合い活動が活発になる。
- ・グループで一つの作品を作り上げる意識が芽生える。

鑑賞では

- ・作品から受ける印象を自由な発想でまとめて、自分の考えを他者に伝えることができる。
- ・一つの作品を全体で鑑賞し、自由な発想で発表し合うことができる。

材料・用具では

- ・グループで使った用具をグループごとに声を掛け合って、後片付けを協力してできる。
- ・順番や担当を決めることで用具を効率よく使いこなすことができる。

(4) 課題点

美術科では、個人で作品を作ることが多いので協同学習を取り入れることは難しいのではと考えがちだが、協同学習を実施してみると、活発に意見を交わす姿が多く見られ、生徒同士の協力によって一つの作品を作ることができ、教育的効果がある。

日々の個人の作品を作る課程で協同学習を追究するのは美術では難しいと考えるが、お互いの作品の良いところを見つけることができる着眼点を持てるよう、協同学習を通して指導していきたいと考える。そして、得意な生徒が苦手な生徒に教えることができるような題材の研究も必要である。

実践レポート

単元・題材名 (授業名)	体育祭学年種目 (体育)	生 徒	全学科1年生徒24名
		場 所	グラウンド
日 時	平成29年6月7日 (水) 2～4校時	指 導 者	T1:海田 T2:学年教員

① 互恵的な相互依存関係

学年の生徒全員が共通の目標を持って活動に取り組み、競技を楽しむことができるよう、チーム対抗の競技や集団行動の指導場面を設けた。特に、行進の練習を重点的にを行い、相手に合わせるといふ協調性や全員でひとつのことを成し遂げることの大切さを学ぶことができるよう指導した。これによって、学年種目の練習においてもチームの中で一致団結するという意識が芽生え、生徒同士が協力して勝利を目指そうという機運を生むことができた。

② 対面的なやりとり

本来味方同士であるチームと対戦することでその作戦が効果的であるのかなどを伝えることができると考え、対戦させた。そうすることで、味方同士で対戦した後の話し合いでは、その作戦が効果的であったのか、更なる改善策などを教え合ったり、褒め合ったりと発言が多く見られた。

③ 個人としての責任

作戦会議の際、チームごとにキャプテンを決めさせ、キャプテンを中心に話し合いを進めるようにした。チーム全員が欠けてはいけない存在であることを意識させるために、話し合いを進行するキャプテン、ホワイトボードに書く係、他の生徒は意見を出す係というように役割を与えた。しかし、役割が重複する生徒が多くいたために、話し合いに積極的に参加できない生徒が生まれてしまった。これを踏まえて、今後の話し合いでは必ず一人一回は発言するなど決まり事を設定して全員が積極的に参加できるようにする。

④ 協同学習スキル

相手チームの気持ちになって考えることで戦略を立てやすくなるため、これについて作戦会議で協議する場面を設定した。その結果、得点が入りやすくなったなどの効果が現れた。その後の練習では、その戦略を基に試合に取り組んでいた。

⑤ チームの振り返り

試合、作戦会議、試合という順で授業を展開した。作戦会議では教師からの講評のあと、チーム内で戦略について振り返りをさせることができた。しかし、最後の試合後には教師からの講評だけになってしまい、チーム内で振り返りさせることができなかった。次回は総練習に向けての戦略を考える時間を設定して終えるようにする。

1 学年 保健体育 学習指導案

単元・題材名 (授業名)	体育祭学年種目 (体育)	生 徒	全学科1年生徒24名
		場 所	グラウンド
日 時	平成29年6月13日 (火) 2～4校時	指 導 者	T1:海田 T2:学年教員

1 授業のねらい

(単元の目標)

- ・ 体育祭の流れを知り、見通しを持つ。
- ・ よさこいの動きや学年種目の内容を知る。

(本時の目標)

- ・ ビデオを見て、前回の競技の振り返りを行うことができる。
- ・ 競技中の自分の役割を理解することができる。

2 生徒について

- ・ 運動能力が高く、寄宿舎の余暇活動で体を動かすことを行っている生徒が多くいる。
- ・ 活動に意欲的な生徒が多いが、活動時間と休憩時間の切り替えが適切に行えない生徒がいる。
- ・ 小集団で話し合いなどの活動はできるが、役割を見つけられない生徒もいる。

3 指導計画

第1回 6月 6日 : 競技の説明と実践

第2回 6月 7日 : 競技の変更点の説明、作戦会議と実践

第3回 6月13日 : 前時の実践の振り返り、競技の作戦会議と実践 (本時)

4 本時の展開

	学習活動	生徒の活動	教師の活動	教材教具
導入 20分	・ 整列・挨拶 ・ 出席確認 ・ 本時の説明 ・ 準備体操 ・ 補強運動	・ 農業科日直が号令を行う。 ・ 体育座りで本時の説明を聞く。 ・ ラジオ体操を行う。 ・ 体育委員が前に出て演示を行う。 ・ 柔軟体操を行う。	・ 農業科：中央の生徒を基準に整列させ、出席確認をする。 ・ 柔剣道場→体育館→グラウンドで行うことを説明する。 ＜協同学習の要素や配慮事項＞ ・ 本時の流れをホワイトボードに視覚的に掲示する。(配慮⑮) ・ 体育委員が前に出て演示をするように促す。 ・ 教員が演示しながら柔軟体操を行う。	・ C D
展開 120分	・ ルール確認	・ ルールをもう一度確認する。	・ 細かいルールや注意点を伝える。	・ ホワイトボード

	・ 結果発表 ・ ビデオを見る	・ 今までの試合結果を知る。 ・ 6月7日に行った試合のビデオを見る。	・ 1～3回目までの結果を伝える。 ・ T1がビデオを見る観点を伝えてから、ビデオを見て振り返る。 <協同学習の要素や配慮事項> ・ ビデオを見て振り返る際は、1つのこと（個人）を見ることと全体（チーム）を見て考えるよう提示する（④） ・ 全員協力して話し合い、チームの目標をWSに記入する。（①）	・ ビデオ ・ テレビ×2 ・ ワークシート1
	・ 作戦を考える ※途中で体育館に移動する。	・ チームのメンバー、チームごとの決まり事、個人の役割の3点について確定させる。	・ ビデオで振り返り、T2がグループに入り、改善点などを伝えて作戦を練り直しさせる。 <協同学習の要素や配慮事項> ・ チームで振り返りを行い、良かったことや改善点などを伝え合って改善策を確定させる。（②） ・ 話し合いで中に個人の役割を明確にしてWSに記入させる。（③） ・ 話し合いに随時T2が入り、言い方の例を代弁したり、行動についてフィードバックしたりする。（配慮②③）	・ ワークシート2
	・ 試合を行う	・ 役割や決まりを確認して試合を行う。 A対B、C対D	・ 本来は味方であるチームで対戦させる。 <協同学習の要素や配慮事項> ・ チーム対抗で行い、各自が自分の役割を果たして取り組めるようにする。（③）	
	・ 振り返り	・ チームの決まりを守れたか、個人の役割を果たせたか確認する。 ・ 味方で対戦して感じた良い点・改善点を伝え合う。	・ ワークシートにチームの決まりと自分の役割について守れたか記入する。 ・ 味方同士で話す時間を設定し、今後の対戦に生かす。T2が話し合いに参加して、発言を促す。	・ WS2
	・ 入退場の練習 ※グラウンド	・ 並び方や笛の合図を確認して、入退場を行う。	・ どの笛が何の合図なのかを確認する。その後、入退場の練習を行う。	・ ピストル ・ コーン ・ 紅白玉

	・ 通し練習 ・ 振り返り	・ 入場、試合、退場までの一連の流れを通して行う。 ・ 本時の学習を通して、振り返りを行う。	・ 本番と同様に通して練習を行う。 ・ 試合を通してチームとして、個人として役割を果たせたか確認する。 <協同学習の要素や配慮事項> ・ どうしてチームや個人がこの結果になったのかを振り返る。 (⑤)	・ ビブス ・ かご
整理 10 分	・ 整理体操 ・ 振り返り ・ 挨拶	・ 体操隊形に広がり、整理体操を行う。 ・ 本時の授業について振り返る。 ・ 農業科日直が号令を行う。	・ 教員が演示しながら柔軟体操を行う。 ・ 授業の講評、学年種目について振り返りを行う。 ・ 農業科：中央の生徒を基準に整列させ、号令を呼びかける。	

5 指導上の工夫

① 互恵的な相互依存関係

チームを少人数として構成し、個人が役割を果たさなければチームとして機能しない状況を設定した。勝敗が明確に分かるよう毎試合結果を発表している。その結果、次の試合も勝つことを目的にチームで取り組めるよう授業を設定した。

② 対面的なやりとり

試合を終えた後チームの戦略について振り返った。その意見をチームで持ち寄り、お互いに意見を交換して、次の試合に向けての改善策などを考えられるよう時間を設定した。

③ 個人としての責任

少人数で行うため、個人の役割を果たさないとチームの勝敗に影響が出る。また、前時の反省で個人の役割を明記しなかったため曖昧になっていたことがあるので、ワークシートを利用して個人の役割を明記するようにして、反省につながるようにした。

④ 協同学習スキル

前時でも振り返りの中で話し合いの場面を設定したが、話し合いが適切に行われていなかったこともあった。そのため、ビデオを見て振り返る際に、考えるスキルの「全体的に見渡して考える」ことや集団活動スキルの「相手の立場に立って考える」ことを伝えたり、T2が介入したりすることで話し合いを促進させる。

⑤ チームの振り返り

今まで試合を行ってきた結果や本時に行った試合を通して、チームとしてどうであったかその理由も含めて考えて、総練習や本番に生かせるようにする。

6 指導の効果

作戦を立てる前のビデオ視聴では、生徒各自の動きに注目させることで、各自が個人の役割を果たしているかを自ら確認することができた。また、チーム全体の動きにも注目させることで、チームの作戦を実行するためには誰がどのように動けばよいかを考えさせることができた。以上をもと

に話し合いをさせた結果、改善策についての発言内容が具体的で、活発な議論となった。その後の試合では、点差が縮まったり、逆転したりするなど、話し合いの成果が試合の結果として現れた。こうした結果を授業の最後に振り返らせることで、チームの団結がより一層高まり、勝利に向けた目標を明確に持つことができた。

7 今後の課題

話し合いの中で一人一回は発言するという条件を付けたが、発言が苦手な生徒がいたり、自分の役割を見つけられない生徒がいたりした。また、特定の生徒の意見だけが抽出される傾向があったり、つぶやき程度の発言はそのまま聞き流されたりといった現象も見られた。

このことから、話し合い（対面的なやりとりの場面）における教師の働きかけを改善していく必要がある。例えば、発言が苦手な生徒に対して意見の述べ方を助言する、司会の役割を教師のモデリングや助言によって理解を促すなど、生徒個々あるいは集団の課題に応じて協同学習スキルを高められるような指導の工夫が必要である。

また、よりよい話し合いのためには、自分の意見をしっかりとまとめることも必要である。そのため、話し合いをさせる前に、自分の意見を考える時間を設定することや、意見をまとめることが苦手な生徒に対する教師の助言も必要と考える。

※ 授業を振り返って

話し合いの活動を多く取り入れる中で、考える時間を明確に設定してから取り組ませることで活動に見通しを持たせることができた。

教師が話をするときは、生徒が話をやめて動きを止めるまで待ってから話をすることで、全体に指示が通りやすくなり、また、メリハリをもって授業を行うことができた。

I C Tを利用して生徒自身の活動の様子を見せることで、単元の最初に行った結果と大きく変わったので、自分自身の姿を見せるというのはとても有効であると改めて感じた。

学習を進めていく上で、発言が苦手な生徒や自分で役割を見つけられない生徒に対しての配慮が少なかった。発言を考える時間を設定したり、T 2 が話し合いに介入し、生徒に発言を求める声掛けをしたりするなど、個別の配慮やグループ活動を円滑に行うための支援を行う必要があった。

実践レポート

単元・題材名 (授業名)	新体力テスト (50m走 ハンドボール投げ)	生 徒	2学年生徒32名
		場 所	体育館 および グラウンド
日 時	平成 29 年 5 月 31 日(水) 6～7校時	指 導 者	T1:田中龍 T2:高田 T3:工藤

① 互恵的な相互依存関係

たかが体力テスト、50m走 1 回走ればそれで終わり、ハンドボールは 2 回投げるだけ、などという短絡的な考えを持たせないという意図で、各学級を 2 グループに分けて身体各部の曲げ伸ばし、アキレス腱伸ばし、ランニング等を入念に取り組むように指示をした。その結果、各グループ内でお互いに声を出し合って数を数えながら、入念に準備運動に取り組んでいた。

② 対面的なやりとり

準備運動を入念に取り組むことで、身体各部の動きが滑らかになり、それが 50m 走やハンドボール投げの記録に影響する。これは、各グループ員が最大限努力して取り組む課題であり、お互いに叱咤激励しながら行わせるように意図して取り組ませた。その結果、お互いに「頑張ろう」「しっかりやろう」などの声が各グループから準備運動中に聞こえてきた。日頃、指導者の言葉かけに対して素直に受け止めないことがある生徒も、グループ員の仲間と一緒に取り組んでいた。

③ 個人としての責任

走り方や投げ方で効果的な動きを確認したり再発見させること、仲間へ良い刺激を与えたり仲間から良い刺激を受けたりすることが 50m 走やハンドボール投げの記録向上に少なからず影響することを意図して、効果的な動きについて各グループで話し合わせた。その結果、真剣に話し合うことができ、各グループからの発表では次のような意見が出た。

- 【50mを早く走るために】 スタート第 1 歩からから全力で走り始める。
腕を速く振る。ゴールまで力を抜かない。
- 【ハンドボール投げについて】 力いっぱい投げる。45 度の角度で投げる。
半径 1 m の円を最大限に使ってステップを踏みこんで投げる。

④ 協同学習スキル

各グループ内での話し合い時や各グループからの発表時に、話している人を向いてきちんと話を聞くこと、出た意見に対してうなづきながら聞くこと、相づちをうちながら聞くことなどを指示して取り組ませた結果、発表する生徒は堂々と意見を述べることであった。

⑤ チームの振り返り

残りの時間いっぱい 50m 走とハンドボール投げの記録測定に費やさなければ全員の記録が測定できなかったため、「チームの振り返り」はできませんでした。授業内でチームの振り返りができなかった場合は、その次の授業の始めに行っていきたいと考えています。

2 学年 体育科 学習指導案

単元・題材名 (授業名)	障がい者スポーツ (シッティングバレーボール)	生 徒	2年生徒 32 名
		場 所	体育館
日 時	平成 29 年 10 月 24 日(火)3～4 校時	指 導 者	T1:田中龍 T2:高田 T3:工藤

1 授業のねらい

(単元の目標)

- ・障がい者スポーツの特性やルールを知る。

(本時の目標)

- ・シッティングバレーボールの運動に合った練習方法を考え、それを取り入れ、移動する力を高めるようにグループ全員が協力して練習をすることができる。

2 生徒について

- ・生徒間には運動技能の差が大きく存在するが、体育で身体を動かすことが好きな生徒が多い。
- ・ソフトボールやバスケットボールのように、打球や送球のスピードを競い合ったり、ドリブルやシュートをする相手の動きに対応して素早く動くことが苦手な生徒が半数近く存在する。
- ・本校入学前までの体育の学習で、自分と同程度の運動能力の仲間と一緒にネットを挟んでバレーボールをする経験が少ない生徒が多い。
- ・体育やスポーツに関してグループで話し合う経験が少ない生徒が多かったが、協同学習の要素を取り入れて話し合う機会を設けて取り組ませてきた結果、グループ内で意見を出し合うことができる生徒が多くなってきた。

3 指導計画

第 10 回 10 月 4 日：シッティングバレーボール（障がい者スポーツ教室）

第 11 回 11 月 11 日：シッティングバレーボールの動きに対応する練習方法①

第 12 回 11 月 24 日：シッティングバレーボールの動きに対応する練習方法②（本時）

4 本時の展開

	学習活動	生徒の活動	教師の活動	教材教具
導入 5 分	・挨拶 ・本時の学習内容の説明	・日直が号令を行う。 (農業科 A の日直) ・本時の学習内容の説明を聞く。	・日直の号令で挨拶をさせる。 ・シッティングバレーボールの運動特性に合った練習方法に取り組みそれをゲームに生かして進めることを説明する。	
展開 80 分	・準備体操	・ラジオ体操をする。 ・各種の準備運動をする。 ・ジョギング ・ストレッチング	・体育委員に演示をさせて、ラジオ体操に取り組ませる。 ・各関節の曲げ伸ばしをさせる。 ・アキレス腱を伸展させる。 ・学科毎に、同じペースで体育館を 3 周、ジョギングをさせる。 ・大腿部裏、足首、肩、首、手首、指などのストレッチをさせる。	

	・シッティングバレーボールに適した運動に取り組む。 ・4つのグループに分かれて活動する。 ・各自の考えをまとめるために、前時の動画を視聴する。 ・お尻を床につけたまま素早く動く力が向上するような練習方法を考えて、一人1回発表する。 ・お尻を床につけたまま素早く動く力が向上するような練習方法をグループで話し合って決める。 ・グループで話し合った練習方法を発表する。 ・発表し合った方法を取り入れた練習にグループごとに取り組む。 ・練習をした方法をゲームの中で試す。	・座位で後ろに倒れる動き ・座位～後ろに倒れる～座位（後頭部をぶつけない練習） ・お尻を床につけたまま動く練習 ・障がい者スポーツ教室で分かれた4つのグループを提示して活動させる。 ・各自の考えをまとめやすくするために、前時の動画を視聴させる。 ・お尻を床につけたまま素早く動く力が向上するような練習方法を考えて、一人1回発表させる。 (生徒は、ボールを使ったプレーの中で練習を繰り返すことで、素早く動く力を向上できると考えがちである。だが、お尻を床につけた姿勢で素早く動く力を高める基本の力を向上させることがプレーに生かすことができることを理解させる。) ・お尻を床につけたまま素早く動く力が向上するような練習方法をグループで話し合って決めさせる。 ・グループで話し合った練習方法を発表させる。 ・発表し合った方法を取り入れた練習にグループごとに取り組ませる ・練習をした方法をゲームの中で試させる。	テレビ DVD ワークシート
	<協同学習の要素や配慮事項> ・素早く動く力が向上するような方法にグループ員全員が協力して練習をすることができる。(①) ・素早く動く力を向上させるために、グループ員全員が練習方法を発表し、話し合っ てグループで取り組む練習方法をまとめる。(②) ・お尻を床につけたまま素早く動く力が向上するような練習方法を考えて、一人1回発表する。(③) ・自分の考えをまとめて、言葉で伝えることができる。(④) ・自分の考えと違う考えがあることを認めながら聞くことができる。(④) ・お互いの考えに違いを認めながらまとめることができる。(④)		

整理 15分	・グループごとの振り返り	・グループごとに学習を振り返る。	・本時の目標に向かって活動することができたかどうかを確認させる	
	・次時の予定 ・挨拶	・次時の予定を知る。 ・日直の号令	・次時の予定を伝える。 ・日直の号令で挨拶をさせる。	

<協同学習の要素や配慮事項>

意見を出し合うことができたか、グループとしての意見をまとめることができたか、
についてワークシートの選択肢から選んで自己評価させる。(⑤)

5 指導上の工夫

① 互恵的な相互依存関係

シッティングバレーボールに取り組むのは本時で2回目である。ボールの落下点に素早く動くことができれば、余裕を持ってプレーをすることができるので、本時はその点を理解させながら、素早く動く力が向上するような方法を使ってグループ員全員が協力して練習をすることに取り組ませる。

② 対面的なやりとり

グループのメンバーがそれぞれで素早く動く力を向上させるための練習方法を考える。個人的なスポーツであればその方法で練習を進めても良いが、バレーボールであれば集団的なスポーツなのでチームとして協力するという行動が必要である。このことを理解させながら、グループ員全員が練習方法を発表し合い、話し合っグループで取り組む練習方法をまとめさせる。

③ 個人としての責任

本時は、お尻を床につけたまま素早く動いてプレーをするシッティングバレーボールの運動に合った練習方法を考え、それを取り入れ、移動する力を高めるようにグループ員が協力して練習をするのを目標としている。そのため、グループ員それぞれが意見を出し合い、それをもとにしてチームとしての練習方法を話し合っまとめさせるため、一人一人が必ず意見を出すように取り組ませる。

④ 協同学習スキル

自分や仲間の意見を出し合い、自分の考えだけではたどり着くことができない素晴らしい意見にするために出された意見をまとめる作業が必要になる。自分の考えだけではなく、自分の意見と違う考えがあることを認めて素直な気持ちで聞き入れたり、お互いの考えに違いがあることを認めながら全体の意見としてまとめさせる。

⑤ チームの振り返り

今回の授業では、お尻を床につけたまま素早く動くための練習方法をグループ内で各自が発表し、それをもとにしてグループ毎の練習方法として考え出して取り入れ、グループ全員が協力して練習することができるかを目標とした。それを確かめるためにチームの振り返りを行う。

6 指導の効果

与えられた課題に積極的に取り組む生徒がいた。課題の提示の仕方が具体的でなかったにも関わらず、「ボールの動きに対応して素早く動くための方法をグループで決める。」という最終目的のために、自分でその方法を思いついたり考えたりして積極的に発言した生徒の姿があった。これは、「①互恵的な相互依存関係」と「②対面的なやりとり」を指導上の工夫として取り入れた効果と捉えることができる。グループ内の話し合いで出てきた意見をもとにして、グループでの練習方法を決めるために意見をまとめようと努力する生徒がいた。求められる方法が出ていても多方向からで

た方法ではなく、数量的にも限られた方法を目にしていろいろと考えを巡らせて、グループで練習する方法を決めようとメンバーの意見や気持ちを取り入れて結論をまとめようと努力していた生徒の姿があった。これは、メンバー全員が意見を出し合って取り組み、「③個人としての責任」を果たしたと考えられる。

自分の意見や考えに固執せず、他のメンバーの意見を聞き入れて全員の意見として認める態度が見られた。これは、自分が出した意見より内容的に高度な意見が出て来ることがなく、期待したほどの意見が出てこなかった場面があったりしてもグループで練習方法を決めなければならないという社会的な約束を何としても果たさなければならないという「④協同学習スキル」を果たしたと判断することができる。自分と意見が合わない場合でも、人間関係を形成したり社会的な態度を形成する能力を育むことに効果を発揮している。

メンバーの意見をまとめてチームの練習方法を確立して練習に取り組み、他のチームの前で発表した。これは、メンバー全員が協力して確立した方法で練習をしたことと、他のチームの練習方法を見て自分のチームの取り組み内容を精査することにつながった。「⑤チームの振り返り」に効果的に働いたということができる。

7 今後の課題

生徒に対して提示する課題が、より分かりやすく、取り組みやすいものにする。

意見を出しにくい状況や他に予想される状況を打開するため、いろいろな方策を携えてT2、T3の動きを事前に決めておく。

ワークシートを利用して意見を書かせたり、述べさせたりするときには、生徒の能力差を考慮して、自由記述の他に選択肢を用意するなど、ワークシートの内容に工夫を加える。

生徒に答えを要求するとき、何について考えるか、どのように考えるかなどの着眼点を提示する。

出された意見に対して対抗意見を出しにくい雰囲気無くす工夫をする。「こんなこと言ったら、後で怖い思いをさせられるのでは・・・」「後から責められる・・・」等の思いを払拭しておかなければならない。普段の学校生活で言わなければならないことを言える雰囲気や環境を整えておく必要がある。

※授業を振り返って

特に次の二点について「協同学習を進めることは難しい」と感じている。

一点目は互恵的な相互依存関係について、ここで『運命共同体』として、すべてのメンバーは共有した目標に向かって一緒に取り組む（互いに協力を必要とする）という関係を作ることだが、「協力をする」意義を感じることができなければ、活動が乏しくなりがちで意見を積極的に出す場面も少なくなる。しかし、意義を感じなくても「今、先生から提示された課題をみんなの知恵を結集してなんとか解決しなければならないのだ。」という意識があれば、過去に「協力したことでお互いに、知り得たり、感じ得たり、共感し得たりした」経験や感動がなくても何とか取り組み進めることができると考えられる。

二点目の対面的なやりとりは、「教え合う、助け合う、議論する、評価し合うことを通して、互いの学習を促進し合う機会を設定する。」自分のために利益になる者から教えてもらうことや助けてもらうこと、逆に教えてあげるなど、一般的に、生徒は自分の役に立った者同士に価値を見出す。したがって、共有した目標に向かって一緒に取り組む姿勢、生徒同士の利害関係の打破などを普段の学校生活・学級活動などから育てていかなければならないのではないかと考えられる。

シッティングバレーボール ワークシート 産 農A 農B 家

氏名：_____

- 1 シッティングバレーボール（パラリンピック）のプレーを注意深く観戦します。
選手の動きの速さに注目しましょう。

①素早い動きをしている選手は、いましたか？

- ・素早い動きの選手がいた。
- ・素早い動きの選手はいなかった。

②その選手を見て、どのように感じましたか？

- ・すごく速く動いていた。
- ・立って動くのと同じくらい速い。
- ・自分は脚が健常だけど、選手の動きにはかなわないなあ。

・その他〈_____〉

③それらの選手は、どの方向へすばやく動きましたか？

- ・ボールが落ちる所へすばやく動く
- ・自分の前の方向へすばやく動く
- ・自分の横方向へすばやく動く
- ・自分より後ろの方向へすばやく動く
- ・その他〈_____〉

④（すぐにできるようにはならないと思いますが）床にお尻をつけたまま速く動くためには、どのような練習をすると良いと思いますか？

- ・足と腕を使って動く練習
- ・前に移動する
- ・後ろに移動する練習
- ・いきなり速く動けないので、少しずつ、速く動けるように練習する
- ・その他〈_____〉

⑤お尻を床につけたまま速く動くことができるようにするために、どのような練習方法がありますか？ グループのみんなで練習する方法を決めましょう。

〈_____〉

〈_____〉

2 グループの一員として振り返りましょう。

当てはまる箇所（・）に○をつけましょう。

① 自分の意見を出すことができたか？

- ・ 意見を出すことができた。
- ・ 意見を出すことができなかった。

② グループの一員として、責任を持って意見をまとめることができたか？

- ・ 意見をまとめることができた。
- ・ 意見をまとめることができなかった。

③ 移動する力を高めようとして、グループ全員が協力することができたか？

- ・ 協力することができた。
- ・ 協力することができなかった。

実践レポート

単元・題材名 (授業名)	バスケットボール (第3回)	生 徒	3学年生徒 20名
		場 所	体育館
日 時	平成29年11月29日(木)5～6校時	指 導 者	T1:山本 T2:鐘ヶ江 T3:初山 T4:藤倉

① 互恵的な相互依存関係

年間を通してチームを編成し、そのチームに勝つためにはどうすべきかを実践の後に振り返りながら話し合う機会を設けた。回数を重ねていくごとに、話し合いの内容も具体的になり、チーム内でどう動くべきなのかを考えたり、相手のチームを協力して分析することも増えてきたりしている。

② 対面的なやりとり

振り返りの中で、特定の人だけが発言するのではなく、全員が発言できるような環境を設定した。自分から意見を伝えることが難しい生徒もいるが、繰り返し行っていく中で周囲がその生徒から意見を聞こうとするなど、チームとしてのまとまりが出てきている。

③ 個人としての責任

話し合いの中で、チームとして連動していくために個々人がどういった動きをすることでチームのためになるのかを考え、実践している。また、責任を果たすために「何を」「どうすべきか」もチーム内で話し合い、個人が責任を果たさないことでのデメリットなども伝えることで、目的である相手チームに勝つ意識を芽生えさせた。

④ 協同学習スキル

話し合いの中で、自分たちのチームがされたら嫌だと感じることを考えさせることで、それが相手チームも同様に感じていることだと認識させた。そうすることで、話し合いの中でも相手チームを機能させないために、どのような方法があるのかを考えながら、話し合うことができるようになってきている。

⑤ チームの振り返り

時間が経つにつれ実践での考えが薄れてしまうことがあるため、実践を終えてすぐに振り返りを行うことを繰り返す。そうすることで、チームとしてどう機能しているのか、より機能するためにはどのような方法があるのかを生徒が主体的になって考えるようになっていく。また、その中で教師からも助言を受けながら振り返ることで、より具体的な振り返りを行っている。

3 学年 保健体育科 学習指導案

単元・題材名 (授業名)	バスケットボール (第4回)	生 徒	3学年生徒20名
		場 所	体育館
日 時	平成29年12月7日 (木) 5～6校時	指 導 者	T1:山本 T2:鐘ヶ江 T3:初山 T4:藤倉

1 授業のねらい

(単元の目標)

- ・パス、ドリブル、シュートなどの基本的な技術を試合で生かすことができる。
- ・チームで協力して試合に取り組むことができる。

(本時の目標)

- ・試合を通して、チームに必要なスキルを考え、練習、実践することができる。

2 生徒について

- ・運動能力は実態差があり、意欲的に取り組める生徒と消極的になってしまう生徒がいる。そのため、体育では、年間を通して同じチームで活動に取り組んでいる。
- ・集団競技では実践を中心に取り組み、その実践を受けて振り返りを行っている。振り返りでは、チームとして個人の役割やチーム力向上のための具体的な方策を考えている。

3 指導計画

- 第1回 10月19日 : 競技の説明、実践
- 第2回 10月26日 : 競技の実践、作戦会議、作戦会議を基にした練習
- 第3回 11月30日 : 競技の実践、作戦会議、作戦会議を基にした練習
- 第4回 12月 7日 : 競技の実践、作戦会議、作戦会議を基にした練習 (本時)
- 第5回 12月14日 : 競技の実践、作戦会議、作戦会議を基にした練習

4 本時の展開

	学習活動	生徒の活動	教師の活動	教材教具
導入 10分	・集合、挨拶 ・本時の内容、ねらいの説明 ・体操 ・ランニング	・学科ごとに整列する。 ・農業科日直が挨拶をする。 ・本時の体育の内容、ねらいについて説明を聞く。 ・体操を行う。体育委員はステージ上で演示を行う。 ・自分のペースでランニングを3分行う。	・学科ごとに整列させる。 ・本時の授業の内容、ねらいについて説明する。 ・体操を行いながら、生徒の様子観察をする。 ・ランニングを行いながら、生徒の様子観察をする。	・タイマー

展開 82分	・ 3 対 3 (10分) ・ チームメンバー発表 (2分) ・ 試合、作戦会議 (15分) ※①	・ チームごとに分かれる。 ・ 3 対 3 を行う。 ・ チャレンジリーグ、フレンドリーリーグのチーム編成を確認する。 ・ チャレンジリーグのチームは7分間で試合を行い、フレンドリーリーグのチームは6分間で試合を行う。 ・ ステージで待機しているチームは、試合を振り返って必要な練習を話し合い、できる練習を行う。	・ 活動を見ながら、動き方の助言をする。 ・ チーム編成を生徒に伝え、ホワイトボードにメンバー表を掲示する。 ・ 実践後の作戦会議では、生徒の話し合いを聞きながらT2～4が助言をし、具体的な方策を考えるよう指導する。 ・ 実践では、T1が審判を行う。 ・ 実践における注意事項を実践前に伝える。 <協同学習の要素や配慮事項> ・ チーム対抗の実践では、それぞれがチームとして与えられた役割を果たすように指導する。(③) ・ 実践後にはチーム内で話し合う作戦会議の時間を設ける。(②、⑤) ・ ワークシートを基に、協力しあって自分たちのチームの目標を設定する。(①) ・ 個人の役割を果たすことができたのかを確認し、次はどうすべきかを考える。(③) ・ 作戦会議を通して、相手にとって嫌に感じることや自分たちにとってされたら嫌なことを考えながら方策を考える。(④) ・ チーム内で良かった点、チームにまだ足りない点を話し合い、どのような練習をすべきかを考える。(⑤) ・ 実践した後に作戦会議、練習を繰り返す行い、練習内容や活動量の質を高めていく。(配慮①)	・ タイマー ・ ボール ・ ビブス ・ メンバー表 ・ ワークシート ・ 作戦ボード
	・ チーム練習 (10分) ※②	・ 試合が終わったら、チームでの話し合いを基に、チームごとに練習をする。	・ 各リーグの練習箇所に分かれて、助言などを行う。	・ タイマー
※①、②を2セット行う。2セット終了後、1試合ずつ行う。				

	・振り返り (5分)	・実践や練習を通して 本時の成果と課題、 次回の重点について 話し合う	・生徒が話し合っている様子を観 察しながら、適宜助言などを行 う。	
整理 8分	・片付け ・整理体操 ・終業挨拶	・一斉に片付けをする。 ・体育委員を中心に整 理体操を行う。 ・次時の連絡を聞いた 後、農業科日直が終 業の挨拶をする。	・片付けの指示を出す。 ・体育委員に整理体操の指示を出 す。 ・次時の授業についての連絡を行 う。	

5 指導上の工夫

① 互恵的な相互依存関係

チームとして相手に勝つための目標を試合ごとに設定していく。それをチーム内で共有しながら実践を行っていく。また、毎回の作戦会議の中で、勝っても負けても振り返りを行い、よりよい方向に向かうためにどうすべきかを協力しあって検討していく。

② 対面的なやりとり

実践後には必ず作戦会議の時間を設け、生徒同士で次の試合に向けてどうするかや試合に勝つために今チームとしてどのような練習が必要なのかを考える時間を設ける。その中で生徒が意見を出し合いながら、生徒同士がやりとりできる時間を設定していく。

③ 個人としての責任

それぞれの役割を作戦会議で明確にしていく。また、実践後にその役割や責任を果たすことができていたのかを作戦会議で振り返り、次の試合に向けての改善策を考えていく。

④ 協同学習スキル

振り返りを行う際に、自チームが勝つための改善点だけではなく、相手チームにとってされたら嫌なことも同時に考えながら作戦会議を行っていく。その方法が妥当であったのかについても、次の実践を終えての振り返りでやっていく。

⑤ チームの振り返り

実践を終えてからすぐに振り返りの時間を設け、自分たちの良かった点、チームとして改善すべき点を話し合いながら、実践に向けた練習内容を自分たちで設定する。また、練習を受けて実践、振り返りを繰り返し行い、生徒たちが主体となることができるよう設定する。

6 指導の効果

実践→作戦会議→チーム練習→実践を行った結果、作戦会議を行うことで、個人の役割が明確になり、それに対して一人一人が責任をもって役割を果たそうとする結果が得られた。また、チームで振り返ることで、他者の意見も聞くことができ、様々な視点や観点で話し合うことができたとともに、実践後すぐに振り返ったこともあり、チームに足りないもの、改善点をすぐに共有しあうことができた。

7 今後の課題

作戦会議の在り方については検討が必要である。どうしても作戦会議を行っていく上で発言の中心になる生徒が固定されてきてしまう。そのため、その人たちが中心となって物事が進んでいく可能性もあるため、いかにチームとして全員で意見を出し合い、共有することができるのかが今後の課題として挙げられる。

※ 授業を振り返って

チームで目標をもち、話し合いをとおして改善していくために、作戦会議で必要な練習を考え、取り組むことで、目標を達成しようとする姿勢が見られた。また、相手に勝つためにはどのような動きをすればいいのかを考えながら動いてる生徒が増えてきた。(相手からフリーのポジションでもらう動きやフリーの人にパスを出そうとする姿勢)

作戦会議を行っていく上で、発言する生徒の偏りが見られた。そのため、より作戦会議を充実させるに当たって、全員が意見を出し合うための工夫や環境設定が必要となる。また、作戦会議を行うに当たって、基礎的な知識が備わっていないと知っていることだけでの話し合いになるために、知識を深めていくこともより大切だと感じた。

実践レポート

単元・題材名 (授業名)	バスケットボール (第5回)	生 徒	3学年生徒 20名
		場 所	体育館
日 時	平成29年12月14日(木)5～6校時	指 導 者	T1:山本 T2:鐘ヶ江 T3:初山 T4:藤倉

① 互恵的な相互依存関係

実践、作戦会議、練習、実践を繰り返し行っていく中で、「相手チームにどうすれば勝てるのか。」
「そのために自分たちに必要なものは何か。」を考えて行えるようになった。チームとしての目標が相手チームに勝つためだけだったものが、勝つための過程（攻撃の仕方、守備の仕方、攻守の切り替えなど）や、相手チームの攻めるべきポイントなどを考えながら実践後の作戦会議を行うことができた。

② 対面的なやりとり

繰り返し活動を行っていく中で、作戦会議だけではなく、実践や練習の時間にも積極的に生徒同士でやりとりするようになってきた。チームの中の個人に求められていることを明確に意識したことで「もっと～しよう。」などと、他の生徒とのより具体的なやりとりが増えている。

③ 個人としての責任

作戦会議を通して、攻撃的な役割や守備的な役割、実践時間の中で何回以上ボールに触れるなどと役割が明確になったことによって、自分の役割に対しての責任をもって実践、練習に取り組む様子が見られた。また、自分で分からない動きについては、教師に助言を求めてくるようになるなど、責任を果たそうとする様子も見られた。

④ 協同学習スキル

実践後すぐにチーム内で相手チームに勝つための意見を出し合うことを繰り返し行った。その中で、チーム内での今の課題や問題点をその都度確認していくことで、チームとして「守備の連携がとれていない。」「普通時の通常の攻撃から速攻をしかけるタイミングへの切り替え方が分からない。」「ゴール下でボールをおさめることができない。」などと課題が出てきている。その課題を解決するために、実践の様子を見て、教師が良かった点や改善点などの助言をしたり、練習方法を提示したりすることで課題解決に向けて取り組むことができた。

⑤ チームの振り返り

実践を終えてすぐに作戦会議の時間を設けた。そこで良かった点や改善点、どのような練習がチームに必要なのかを確認した。また、その練習を生かして次の実践を行うことを繰り返し行ったため、あるチームでは、チームとしての方向性が具体的（攻撃では誰がボールを運ぶのか、守備では誰がどのように守るのか）になった。別のチームでは、実践を通して、ボールに固まりすぎる傾向があったため、ボールに固まらないことや確実に点数を取るため、シュート率が1番高い生徒を前線にもってくるなど考えている様子が見られた。

まとめのレポート

教科・形態名	保健体育	部会メンバー	高山、中市、内田、海田 住谷、田中、山木、山本
--------	------	--------	----------------------------

（１）保健体育の指導内容や特性

保健体育科で取り扱う内容としては、体づくり運動、スポーツ、武道、ダンスおよび保健がある。運動を実践していく中で運動の技能を高めるばかりではなく、集団競技を通して、望ましい人間関係の形成を促進することにつながる。また、体を動かす楽しさや心地よさを味わえるとともに、健康や体力の状況に応じて自ら体力を高める方法を身に付け、運動やスポーツの習慣を養うことができる。

体育で身に付けた体力や運動能力は、学習や生活の効率を高め、社会自立に必要な体力や判断力、責任感、協調性などを育成することにつながり、情緒の安定を図ることにも有効である。

保健に関する知識、技能、望ましい習慣及び態度を身に付けることは、健康で安全な生活を充実させ、将来の生活を豊かにすることにつながる。

将来の余暇活動も視野に入れた適切な運動の経験や健康・安全についての理解を通して、心身の調和的発達を図り、明るく豊かな生活を営む態度と習慣を育てることを目標としていることが特徴である。

（２）保健体育における協同学習の授業づくり

- 1 互恵的な相互依存関係
 - ・チームとしての目標を設定する。
 - ・集団競技における作戦会議を実施する。
- 2 対面的なやりとり
 - ・作戦会議で目標達成に向けての意見を出し合う。
 - ・名前や声を掛けながらパスをする。
 - ・お互いの動きを見て、アドバイスし合う。
- 3 個人としての責任
 - ・ポジションなどの役割を明確にする。
 - ・線審や得点板などの主審補佐業務を設ける。
- 4 協同学習スキル
 - ・ワークシートに記入しながら、作戦会議、反省、改善策を考える。
 - ・チームの改善点及び相手チームのプレイを分析する。
 - ・協力して道具を準備・片付けをする。
 - ・アドバイスをする。
- 5 チームの振り返り
 - ・視聴覚教材（ビデオカメラ、テレビ）を使用し、試合や運動の様子を振り返り、効果的な戦術について話し合う。
 - ・試合や運動の様子を振り返り、ワークシートに記入する。
 - ・良かった点や改善点を基に練習内容を考える。

(3) 保健体育で協同学習を取り入れるメリット

- ・「実践→作戦会議（振り返り）→実践」の一連の流れを行うことで、生徒たちが自主的に相談することが増える。
- ・チームで試合をした後に振り返りを行うことで、他者の意見を聞くことができ、様々な視点や観点で話し合うことができる。
- ・試合中や他チームの応援などの場面で、生徒同士が声を掛け合うことができる。
- ・話し合い活動で司会をした生徒が、試合の中でも司令塔として活動することができる。

(4) 課題点

各種目で話し合い活動を取り入れることで、話し合いはスムーズにできるようになってきているものの、体育などの運動になると、ルールの理解力や運動能力の差が課題となる。そのため、ルールの理解や競技に慣れるための時数確保、及び指導法の工夫を行う必要がある。また、各種目の基礎基本や戦術などについても1学年段階から設定し、指導していかなければならない。

作戦会議の在り方についても検討が必要である。作戦会議を行っていく上で発言の中心となる生徒が固定されてしまいがちになるため、考える視点や観点について指導者が事前に提案するなど、生徒自身がチームとして全員で意見を出し合い共有することができるように、いかに環境を設定していけるかが課題となる。